

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 198



1988 MAY



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

日本ヒマラヤ協会

昭和63年度通常会員総会のお知らせ!!

日本ヒマラヤ協会昭和63年度通常会員総会を下記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意志決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。(委任状は、別途送付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。

5月15日までに必着するようお願いいたします。)

記

1. 日時 昭和63年5月28日(出午後1時00分)
2. 場所 シチズン・ボール会議室
(東京都新宿区高田馬場4-27-29)
☎03-363-2211
(H A J ルーム前)

3. 議事

- (1) 議案第1号 昭和62年度事業報告について
- (2) 議案第2号 昭和62年度収支決算について
- (3) 議案第3号 昭和63年度事業計画について
- (4) 議案第4号 昭和63年度収支予算について
- (5) 議案第5号 会員の除名について

4. その他

表紙写真

ヒマラヤのマッターホルンとも云われる秀峰マチュプチャレ(6,993m)は、眺める位置によっていろんな山容を見せてくれる。南壁のC2付近からは平凡な山容となって眺められる。

(群馬県冬期アンナプルナI峰登山隊)

ヒマラヤ No.198

-
- | | | |
|----------------------------------|-------|--------------|
| 1. PEOPLE | ————— | Jean COUDRAY |
| 2. 冬期アンナプルナ南壁への道 | ————— | 八木原圀明 |
| 11. MOURNING — 斎藤安平 — | ————— | 渡辺 齊 |
| 13. ヒマラヤ・ニュース <地域ニュース・インフォメーション> | | |
| 15. 1987年パキスタン登山隊 | | |
| 19. ソ連山旅への誘い | | |
| 22. 一枚の地図から | ————— | 山森 欣一 |
| 24. 寸感・事務局日誌 | | |
-

PEOPLE

JEAN COUDRAY

UIAA (Union Internationale Des Associations D' Alpinisme、国際山岳協会連合)は、1932年8月27日にアルプスを舞台とするヨーロッパ諸国の山岳共同体として結成された団体である。其の後、半世紀以上の歴史を重ねる中で徐々に加盟団体の輪は世界に広がり、現在では44ヶ国から49団体が加盟する国際団体となっている。

UIAAは、登山と云うスポーツが国境を越えた自由で且つ円滑な活動が出来るように、国際間の諸問題を相互協力に基づいて解決することや、登山技術の向上、登山用具、登山医学、自然保護、その他あらゆる諸問題の解決・研究・改善・普及・教育等を行うことを目的としている。

現在、UIAAには安全委員会、遠征委員会、医学委員会、自然保護委員会、登山委員会、青年委員会と云った6つの専門委員会が常設されており、それぞれ委員会規約ののっとり活動している。

ジャン・コードレイ氏は遠征委員会 (Expedition Committee) の委員長である。

遠征委員会の活動は、遠征隊の希望に沿う情報収集とその提供、遠征隊を受入れる国と送り出す国の相互理解、遠征のための必要な交渉と問題発生に対する公式な助言、情報交換……等を目的として運営されている。

今、遠征委員会では、①遠征隊のマナー、②遠征隊からのレポート収集とその情報提供、③アルパイン・スタイル及びライト・エクスペディションの定義、④若いヒマラヤニストの養成、⑤遠征隊を受入れるヒマラヤ諸国との関係、⑥環境汚染で問題のある山のクリーニング遠征、⑦ヒマラヤでのレスキューと保険。と云ったテーマを中心に活動を展開している。

ジャン委員長は、「今の遠征隊は、いかにスポンサーをみつけてお金を集めるかにばかり気を使って、登山の根本的な事が忘れられている。目的の山に対してはそれに合致するメンバーや装備をよく検討すべきであり、目標に対して過剰な装備や資金は控えるべきである。また、良い記録や成



功を望むためにいろいろな手段が用いられるが、それらの手段が欺満的なものであってはならないし、また、どのような戦略、戦術を採ろうとも安全対策が一番尊重すべきである事を忘れてはならない。」と語る。

現在、遠征委員会で検討されているアルパイン・スタイルやライト・エクスペディションの定義については、「最近の山岳雑誌や新聞等でこれらの用語が頻繁に用いられているが、その定義が明確でないために真実で正確な報告が伝わりにくくなっている。この定義づけの目的は、決して登山者を不可能なものに挑戦させたり、山に於ける競争を激化させるためのものではなく、登山がいかに行きわたるかをはっきりさせ、登山者が情報を正しく判断できるようにするためである。」と語る。

ネパールのマナンに在る登山学校で3年間、シエルパなどの現地指導に当たられた氏は、「若い人達にもヒマラヤで遠征登山の研修を行ってもっとも若いヒマラヤニストを養成してみたい。」と語り、また「若い人達には煩わしい思いをさせないで、アルプスへ出かけるような気持で行けるように手助けをしたい。」と抱負を語る。

ジャン・コードレイ (45)

1979年K2 (8,611 m) 南西稜

1984年ヤルン・カン (8,505 m) 南東クローワール等、15年に亘る豊富な遠征経験を持つ。

現在は、フランス国立登山スキー学校 (E N S A) の教官を務める。



群馬モンロー主義にみる

冬期アンナプルナ南壁への道

隊長 八木原 罔明

▲ アンナプルナ南壁の全容 The South face of Annaurna I

はじめに

私共、群馬県冬期アンナプルナ I 峰登山隊は 1987年12月20日午後3時17分、冬期アンナプルナを南壁ルートより4名が登頂に成功することが出来ました。

ただ何とも口惜しく、残念なのは登頂に成功した小林俊之君と斎藤安平君の下山中の転落死亡事故です。二君には勿論、残された御家族の方々にも誠に申し訳なく思っております。

然し、今回の南壁登山は世界のヒマラヤ登山史の中で、冬期8,000m 峰の岩壁登山の成功と云う、先駆的な1ページを彼等自身が自らの手で切り開いたことは間違いの無い事実であります。

このことについて、私共は2隊員を失ったと云うことで完璧な成功を成し得たとは勿論考えてはおりませんが、全てが相殺されてゼロになるわけでは無いことも確信しております。山田、三枝の2隊員は無事生還しておりますし、全隊員で闘かいとったものですから。

冬の8,000m 峰の岩壁と云う極限の世界で闘かいとった事実、また小林、斎藤両君のような事故も起り得ることは過去の登山史の中でも、また身近なところでも見聞きしております。

だからこそ私達は生活を賭け、色々なものを捨て、文字通り生命を賭けて困難なヒマラヤの山々

を登り続けていると云うことでもあります。

小林、斎藤両君を失ったことは厳粛な事実として、残された私達が受け取めなくてはなりません。兎に角「困難に打ち勝って登った」と私自身が云わなくては彼等も、また第2次アタック隊としてC3に控えていた隊員達も救われないと考えます。

群馬の冬期巨峰への系譜

アンナプルナ登山の報告にあたり、先ず本登山のいきさつから申し上げたいと思います。

1978年秋、田中成幸(現群馬岳連理事長)を隊長として、ダウラギリ I 峰南東稜の初登攀に成功した私共群馬岳連は、海外登山研究会を中心に「次」を模索していた。

そして次もやはり「8,000m 峰」の「バリエーション・ルート」とし、時期も1983年の群馬で開催される「あかぎ国体」後と定め、目標の山とルートの選定に入っていた。

そのためのメンバー養成も考え、1982年秋のカモシカ同人によるダウラギリ I 峰北壁ベアー・ルート隊に岳連会員9名が参加した。後に私達と多くの登山を続けるようになった斎藤安平を入れると、18名中、10名と云う事になる。

このダウラギリ I 峰北壁登山は、1975年のIV 峰、1979年のII 峰、III 峰、V 峰の縦走成功により、次

にI峰（主峰）を登ることにより、「カモシカ同人によるダウラギリ山群の全山登頂」という目論みの大きなステップとして計画されたものであった。

参加した者は、石川忍、宮崎勉、松永幸雄、山田昇、鈴木繁、阿久沢芳雄、金井敏夫、佐藤光由、斎藤安平と八木原の計10名である。そして、山田昇、斎藤安平、小松幸三が登頂し、小松はI峰からV峰までの登頂を果たした。

冬のアンナプルナ南壁登山計画は、27日間で、過去9隊が退けられ続けていた北壁・ベアー・ルートの初登攀に成功した帰りのキャラバンの初日に始まった。

ネパール政府は冬期登山の解禁を発表したが、その中で早くも、ポーランド隊が恰も政府を押し切ったような形で、1979年（12月31日にBC建設）から80年にかけての冬にエベレストへ行き、2月17日に為遂げてしまっていた。ポーランドはこれまで、1973年にヒンズー・クシュのノシャック、74年にローツェと既に冬のヒマラヤ登山の実績があった。

翌年冬には植村直己を隊長とするエベレスト隊、アラン・ラウス隊長らのエベレスト西稜隊、坂下直枝の単独によるアンナプルナ北面他、幾つかの冬期登山が試みられたが、何れも寒気、烈風等により退けられてしまった。

これらにより、これからのヒマラヤ登山の潮流が、より自然条件の厳しい「冬期」に大きく向うであろうと考えた私共は「8,000m峰」の「バリエーション・ルート」からの登頂、に『冬期』を加え、この3つの大条件を前提に計画を練り直し、推進することにした。

冬の厳しさは、8,000m以下には余り無く、8,000mを超えた山にしか本当の冬の厳しさは無い。それは其の後の登山を含めてであるが、殆どの隊が7,000m台までは比較的短時日のうちに容易に到達していることから証明されている。（註：1）

冬への潮流は既に大きく動いており、私共のベアー・ルート登山の数ヶ月後に来る冬にも日本隊だけで3隊の計画があった。

1つは山田昇を隊長とする日本ヒマラヤ協会隊がマナスルへ、ダウラギリI峰のノーマル・ルー

トである北東稜へは北海道大学隊、そしてエベレストへは加藤保男を隊長とするイエティ同人隊が日本人による冬期初登頂を狙って先陣争いに入ろうとしていた。

そして1983年～84年冬の冬期エベレスト登山隊に副隊長として参加することになっていた宮崎は、クープでの冬期エベレストの観察を止め、鈴木繁と共に加藤隊へ現地参加することになった。

話を戻して、ベアー・ルートからのキャラバンの初日、エベレスト南西壁、ローツェ南壁、マカルー北西壁、ダウラギリ南壁等の候補の中から、アンナプルナI峰南壁にしぼり、カトマンズでの登山隊解散後に阿久沢、金井、佐藤に偵察させることにした。

アンナプルナにした理由は、前三者は余りに困難が予想され、当時考えられた群馬のメンバーでは余りに荷が重すぎると思われ、ダウラギリは過去、群馬岳連でIV峰とI峰、カモシカ同人で私達が参加してのやはりIV峰とI峰と登っており、「またダウラギリか」という感じが強く、この山群から離れたかった。

そして私自身が隊長となるのであれば、なおのこと成功率の一番高いアンナプルナの南壁とし、その中でも最も可能性の高い、ポニントン・ルートとしたかったのである。

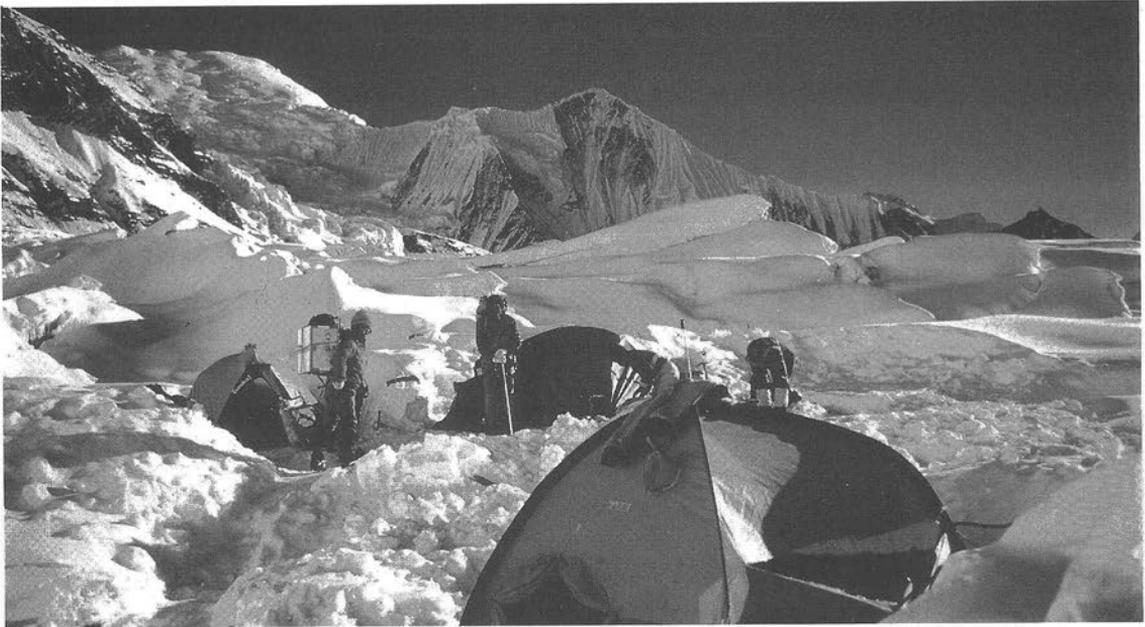
冬に長いルートを時間をかけても登るためには、ジェット・ストリウム風の影響を受けない「内院で形成された山」が良いであろう。雪もそれ程は降るまい、と考えた。

そしてその年の冬期登山は、山田のマナスルでは隊長である山田自身が登山活動初日にヒドン・クレバスに転落して足首を骨折し、自身の活動が



▲ Base Camp (4,300m)

▼ Camp 1 (5,300m)



不能になってしまった。挙句にアタックに出た隊員のうち1名が、強風などにより登頂を断念しての下山中に転落死して不成功となった。

宮崎の参加した加藤保男隊では、小林利明とアタックに出た加藤が単身登頂して春、秋、冬の3シーズン登頂に成功したものの、合流してのビヴァーク中に小林隊員ともども行方不明になってしまい、北海道大学隊のみが完全に登頂成功と云う結果であった。

然し、この北大隊の成功には少し釈然としないところがあった。と云うのは、秋のうちに通常の登山隊のBCを「レスト・キャンプ」と称し、その上のアイスフォールを越え、ベース・キャンプを6,000m近い、5,940mと云う高所である北東コルに設けての登頂と云うことであった。

このBCの位置については、以前にもネパール人を雇用する場合の保険や賃金、装備の支給の問題などとからみ、多少の論議がされたことがあった。

規則がある訳ではないので、自分達で「ここがBCである」と云えば、荷上げ量の一番多い下部のキャンプに、そう云った名目でのシェルパを雇えるのではないかと云うものであった。然し、それも常識論の中で認められることなく消えて行ったと云ういきさつもあったのである。

1983年12月、カモシカ同人によるエベレストの

南北同時登頂計画には、南側に宮崎が副隊長、山田が登攀隊長、鈴木が隊員として参加した。

北側には三枝照雄が隊員、斎藤安平が撮影隊員として参加、北側は登頂出来なかったが、南側の山田が冬のエベレストに登頂を果たした。他には尾崎隆、村上和也、ナワン・ヨンデンと一緒に登頂をした。

この登山で戦略家としての宮崎の評価が日本国内で定着したと云って良いであろう。

これらの冬の経験を踏まえて、1984年～85年に私共がアンナプルナの南壁へ挑んだのであった。

(註：2)

その時の反省点としては、失敗の最大の理由としては人為的なもの、つまり隊員の力不足、気力不足であり、その他に数度に及ぶ大降雪、シェルパに関する不運な事故も災いしたが、シェルパの人選の失敗などであった。

失敗したとは云え、技術的には決して登れないルートではない、と強く感じた私共は近い将来、必ず雪辱を果たそう、と決意新たに準備に入った。

1985年2月に帰国した私に持ち込まれたのが、「植村直己物語」のエベレスト撮影隊長の話であった。

ヒマラヤ登山を成功させるには、ヒマラヤ登山をより経験させることが最も必要であると考えていた私は、隊長を引き受け、宮崎、山田らと共に

アンナプルナ南壁へ続く群馬岳連会員中心のエベレスト撮影隊を組織した。

宮崎副隊長、山田登攀隊長の鉄壁の布陣、隊員が名塚秀二、三枝照雄、佐藤光由、小林俊之とカメラマン助手の斎藤安平を入れての撮影登山隊はカメラマンを含む11名中、8名が岳連会員と云う構成となり、私の思惑通りの結果を得ることが出来た。

カメラを持たせたシェルパが酸素器具の不調で途中下山したため、頂上での撮影は出来なかったものの、7名がエベレストの登頂に成功した。そのうちの5名が群馬岳連の会員であり、やはり酸素器具の故障で惜しくも登頂を逸した斎藤は南峰直下まで行き、下降してしまった。

当時19歳の群大生であった小林には登頂のチャンスを与えなかったが、約8,000mのサウス・コルまでは睡眠中の酸素使用のみで2度到達し、立派に任務を果たしたのであった。

若く、まだ経験の浅い彼が、いくら酸素を吸ったとは云え、自分一人の力で登り、確実に帰ることに不安があったからであった。

(註：1) (社)日本山岳協会刊「第24回海外登山技術研究会報告」の「冬期ヒマラヤ8,000m峰登山隊」リストのサマリーを参照されたい。

(註：2) 群馬岳連報「ねろ」23号、25号、「山と溪谷」588号、報告書 ANNAPURNA等を参照されたい。

冬のアンナ南壁を15日間で!!

宮崎は前回のアンナプルナ登山の反省の上に立ち、迅速かつ悪天候にもつかまらずに、安全に登るためのタクティクスを再考、再構築をした。

眼目は登山期間を15日間前後とする短期速攻である。冬のアンナプルナの南壁を15日間で登る。と云うのは、全隊員が全て足並の揃った豊富なヒマラヤ登山経験者では無いだけに、やはり大胆な計画であったと云えるであろう。

然し、一番の問題である天候のことを考えれば、先ずこれを大前提とすべきである。我々の経験と実績をもってすれば可能であるとする宮崎は、それを達成するための方策として、先ず充分なる高所順応計画を立てた。

もう一つは、BCをもっと南壁に近づけ、キャンプ数を減らし、なお且つたとえ降雪があっても、安全に長期戦にも耐えられる地点へのキャンプ建設であった。

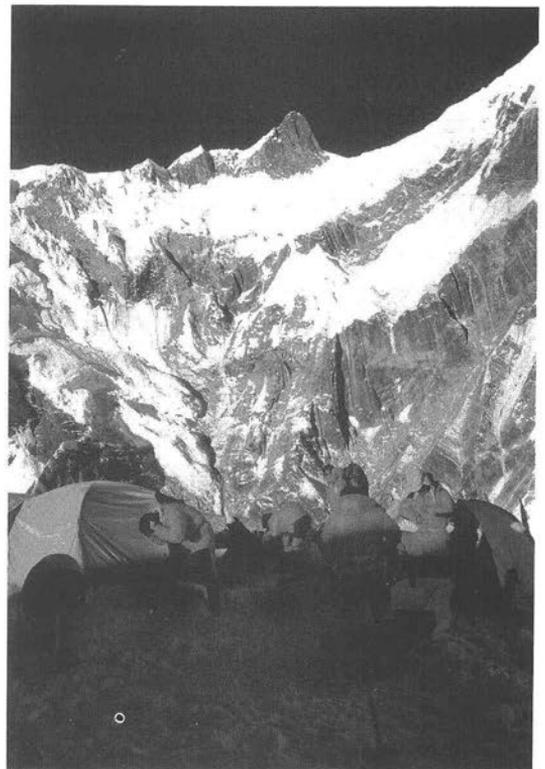
前回の経験者達からは、C2～C3間の標高差があり過ぎるのではないかと云う意見も出されたが、宮崎はそれを押し切り、可能である、と断じた。実際にそれは成功への一要因となった。

前回は7,700mの第6キャンプをアタック・キャンプとする予定であったが、さらにキャンプを1つ減らし、同地点を第5キャンプとするものである。

初登攀を為遂げた1970年のボニントン隊は、そこを第7キャンプ地点としていたのである。キャンプを2つ減らすことになった。

12月前半と云うのは、11月からこの頃までが1年のうちで、最も天候の安定する時期であり、厳密に考えれば、冬期登山ではない、とする私共の印象は拭い去れない。

然し、現段階としては、1月、2月の冬の真最中の登山はより困難すぎるため次の厳冬期登山のワンステップである、と云う考え方であった。



▲ ファングとC2 The Varaha Shikhar (Fang) viewed from Camp 2

▼ C2から上部 The upper route of Camp 2



クリス・ボニントン著「アンナプルナ南壁」を読み、前回の経験の上に立てば、無駄な装備などを準備することもない。それらを十二分に検討した上での宮崎の戦略であった。

それでも慎重の上にも慎重を期し、15日間で完登出来なかった場合、二月までズレ込むことも考慮に入れ、2月中旬までの食糧を用意した。

長びくと云うこの理由は降雪にやられる、と云うことである。ロープや登攀具が雪に埋没し、使用不能になり、ルート工作のやり直しを迫られる可能性があるため、倍の数量を用意した。

前回も今回も、私は隊員達にこう繰り返して云い続けてきた。「我々は1970年当時のボニントンの卒いたイギリス隊と較べれば、ヒマラヤに於ける経験と実績は、彼等とは比較にならない位、上である。しかも寒気は多少ゆるいかも知れぬが、彼等は冬とは比較にならない程の降雪量に苦しめられながら、春に登っている。それらを考え合わせれば、我々に登れないはずがない」と。

事実、ヒマラヤ登山隆盛への緒についたばかりの当時のイギリス隊のヒマラヤ経験は、と云えばボニントン隊長のヌプツェとアンナプルナII峰、

ドン・ウイランスのマッシュャーブルム他の3回程で、延べ10回に満たないものであった。

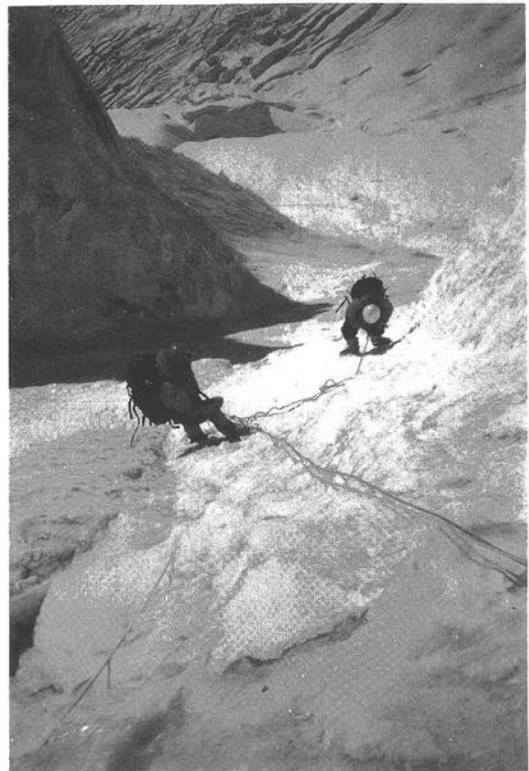
勿論、あの時代にヒマラヤ登山の鉄の時代と云う新しい時代を開く登山隊に参加するような登山家である。例えばドゥーガル・ハストンのようなアルプスその他の困難な登攀の経験者ではあった。

私共の側は今回の場合、星野総隊長と藤田ドクターを除く12名の経験は、マッキンリーやアルプス、中国の奥地など他を除くヒマラヤ地域だけで延べ60回を数える。

17年と云う年月が過ぎた今、初登攀時のロープやハーケンが使えるわけではない。その意味では技術的な困難性には変わりはないが、コロンブスの卵ではあり、彼等の登山を参考に出来るし、岩場に残るロープなどがルートを教えてくれる。

基本的にはイギリス・ルートに拠る登山であり、自らの目や考え方で全ルートに登攀のラインを引く必要はない。その分だけ楽で、易しいとも云える。

群馬モンロー主義



▲ C2～C3間 Climbing up to Camp 3

私は何年位前からか、かなり「群馬」を意識し、群馬にこだわってヒマラヤ登山を続けて来ている。私はそれを「群馬モンロー主義」と云っている。

何故？ と云う程のものでもない。兎に角、私自身が群馬に住み、群馬に取り敢えず生きているからである。ごく近場、身近にいる者でチームを作れば、コミュニケーションがしやすく、準備もやりやすいからでもある。

ナショナルリズムを小さく地域化したようなセクショナルリズムとも少し違う。

然し、群馬県人や群馬岳連だけのレベルで考え、実践しても、そのレベルから脱し得ない。もっと広い視野でモノを見なくては、井の中の蛙ならぬ「群馬の中の蛙か、お山の大将」になってしまう。

世の中には自分よりずっと優れている人達が数多くいる。登山の世界で云えば、経験豊富な優秀な登山家、我々には考えられないようなアイデアを出す人、戦略家、交渉ごとにてけている人、オルガナイザー、学者・研究者、批評家などなど。

それらの人々に直接、接したり、一緒に登ることにより、刺激、触発され、学び、教わりながらの実践が出来る。本を読むだけでは不充分なところは補えない。生身の人間からは生きた考え方を聞くことも出来るからだ。

いくら恵れた環境とは云え、群馬岳連隊をそう度々短期間のうちに派遣出来る訳ではない。自分達の身近な範囲や頭の中だけでは自ずと限界もある。

そのために私は、私自身が群馬県以外の登山隊に参加する場合、必ず他の群馬の人間を誘って一緒に参加して来た。私自身が参加しなくとも、参加を勧めた。特に日本ヒマラヤ協会やカモシカ同人などがそれである。

これらの登山隊への参加は、自分達ではとても持ち上げることの不可能な大きな計画や特殊な地域での登山や探検を可能にしてくれた。この事は群馬のヒマラヤ登山のレベル・アップと活動の幅を広げることに非常に大きく貢献した。

峭峻の南壁に向けて

本隊の木村、阿久沢、神戸、弥野、そして私の5名は10月29日、カトマンズに到着したが、空港での荷物のチェックは厳しく、時間がかかった。これは11月2日～4日までの3日間、南アジア・サミット会議が開催されるためのものであった。

こうした厳戒体制の中で、先発隊の6名は、入手困難であったプロパンガスの充填や品不足の灯油、砂糖の購入を素早く済ませ、梱包作業まで終了させてしまっていた。経験者ならではの早業と見た。

サミット前から、トラックやバスの市内乗り入れ禁止措置が取られていたが、特別通行許可証を取得したり、出発前の準備は、まさに八面六臂の彼らの活躍で終了した。

其の後、キャラバンのスタート地であるボカラに順次集結してキャラバンを開始した。

群馬県山岳連盟会員による 主な高峰登山(抄)

九八三年冬	九八四年春	九八四年秋	九八四年冬	九八五年夏	九八五年秋	九八五年冬	九八六年夏	九八六年秋	九八六年冬	九八七年夏	九八七年秋	九八七年冬	九八八年秋	九八九年春	九八九年夏	九八九年秋	九八九年冬	九九年春	九九年夏	九九年秋	九九年冬	二〇〇〇年春	二〇〇〇年夏	二〇〇〇年秋	二〇〇〇年冬	二〇〇一年春	二〇〇一年夏	二〇〇一年秋	二〇〇一年冬	二〇〇二年春	二〇〇二年夏	二〇〇二年秋	二〇〇二年冬	二〇〇三年春	二〇〇三年夏	二〇〇三年秋	二〇〇三年冬	二〇〇四年春	二〇〇四年夏	二〇〇四年秋	二〇〇四年冬	二〇〇五年春	二〇〇五年夏	二〇〇五年秋	二〇〇五年冬	二〇〇六年春	二〇〇六年夏	二〇〇六年秋	二〇〇六年冬	二〇〇七年春	二〇〇七年夏	二〇〇七年秋	二〇〇七年冬	二〇〇八年春	二〇〇八年夏	二〇〇八年秋	二〇〇八年冬	二〇〇九年春	二〇〇九年夏	二〇〇九年秋	二〇〇九年冬	二〇一〇年春	二〇一〇年夏	二〇一〇年秋	二〇一〇年冬	二〇一一年春	二〇一一年夏	二〇一一年秋	二〇一一年冬	二〇一二年春	二〇一二年夏	二〇一二年秋	二〇一二年冬	二〇一三年春	二〇一三年夏	二〇一三年秋	二〇一三年冬	二〇一四年春	二〇一四年夏	二〇一四年秋	二〇一四年冬	二〇一五年春	二〇一五年夏	二〇一五年秋	二〇一五年冬	二〇一六年春	二〇一六年夏	二〇一六年秋	二〇一六年冬	二〇一七年春	二〇一七年夏	二〇一七年秋	二〇一七年冬	二〇一八年春	二〇一八年夏	二〇一八年秋	二〇一八年冬	二〇一九年春	二〇一九年夏	二〇一九年秋	二〇一九年冬	二〇二〇年春	二〇二〇年夏	二〇二〇年秋	二〇二〇年冬	二〇二一年春	二〇二一年夏	二〇二一年秋	二〇二一年冬	二〇二二年春	二〇二二年夏	二〇二二年秋	二〇二二年冬	二〇二三年春	二〇二三年夏	二〇二三年秋	二〇二三年冬	二〇二四年春	二〇二四年夏	二〇二四年秋	二〇二四年冬	二〇二五年春	二〇二五年夏	二〇二五年秋	二〇二五年冬	二〇二六年春	二〇二六年夏	二〇二六年秋	二〇二六年冬	二〇二七年春	二〇二七年夏	二〇二七年秋	二〇二七年冬	二〇二八年春	二〇二八年夏	二〇二八年秋	二〇二八年冬	二〇二九年春	二〇二九年夏	二〇二九年秋	二〇二九年冬	二〇三〇年春	二〇三〇年夏	二〇三〇年秋	二〇三〇年冬	二〇三一年春	二〇三一年夏	二〇三一年秋	二〇三一年冬	二〇三二年春	二〇三二年夏	二〇三二年秋	二〇三二年冬	二〇三三年春	二〇三三年夏	二〇三三年秋	二〇三三年冬	二〇三四年春	二〇三四年夏	二〇三四年秋	二〇三四年冬	二〇三五年春	二〇三五年夏	二〇三五年秋	二〇三五年冬	二〇三六年春	二〇三六年夏	二〇三六年秋	二〇三六年冬	二〇三七年春	二〇三七年夏	二〇三七年秋	二〇三七年冬	二〇三八年春	二〇三八年夏	二〇三八年秋	二〇三八年冬	二〇三九年春	二〇三九年夏	二〇三九年秋	二〇三九年冬	二〇四〇年春	二〇四〇年夏	二〇四〇年秋	二〇四〇年冬	二〇四一年春	二〇四一年夏	二〇四一年秋	二〇四一年冬	二〇四二年春	二〇四二年夏	二〇四二年秋	二〇四二年冬	二〇四三年春	二〇四三年夏	二〇四三年秋	二〇四三年冬	二〇四四年春	二〇四四年夏	二〇四四年秋	二〇四四年冬	二〇四五年春	二〇四五年夏	二〇四五年秋	二〇四五年冬	二〇四六年春	二〇四六年夏	二〇四六年秋	二〇四六年冬	二〇四七年春	二〇四七年夏	二〇四七年秋	二〇四七年冬	二〇四八年春	二〇四八年夏	二〇四八年秋	二〇四八年冬	二〇四九年春	二〇四九年夏	二〇四九年秋	二〇四九年冬	二〇五〇年春	二〇五〇年夏	二〇五〇年秋	二〇五〇年冬	二〇五一年春	二〇五一年夏	二〇五一年秋	二〇五一年冬	二〇五二年春	二〇五二年夏	二〇五二年秋	二〇五二年冬	二〇五三年春	二〇五三年夏	二〇五三年秋	二〇五三年冬	二〇五四年春	二〇五四年夏	二〇五四年秋	二〇五四年冬	二〇五五年春	二〇五五年夏	二〇五五年秋	二〇五五年冬	二〇五六年春	二〇五六年夏	二〇五六年秋	二〇五六年冬	二〇五七年春	二〇五七年夏	二〇五七年秋	二〇五七年冬	二〇五八年春	二〇五八年夏	二〇五八年秋	二〇五八年冬	二〇五九年春	二〇五九年夏	二〇五九年秋	二〇五九年冬	二〇六〇年春	二〇六〇年夏	二〇六〇年秋	二〇六〇年冬	二〇六一年春	二〇六一年夏	二〇六一年秋	二〇六一年冬	二〇六二年春	二〇六二年夏	二〇六二年秋	二〇六二年冬	二〇六三年春	二〇六三年夏	二〇六三年秋	二〇六三年冬	二〇六四年春	二〇六四年夏	二〇六四年秋	二〇六四年冬	二〇六五年春	二〇六五年夏	二〇六五年秋	二〇六五年冬	二〇六六年春	二〇六六年夏	二〇六六年秋	二〇六六年冬	二〇六七年春	二〇六七年夏	二〇六七年秋	二〇六七年冬	二〇六八年春	二〇六八年夏	二〇六八年秋	二〇六八年冬	二〇六九年春	二〇六九年夏	二〇六九年秋	二〇六九年冬	二〇七〇年春	二〇七〇年夏	二〇七〇年秋	二〇七〇年冬	二〇七一年春	二〇七一年夏	二〇七一年秋	二〇七一年冬	二〇七二年春	二〇七二年夏	二〇七二年秋	二〇七二年冬	二〇七三年春	二〇七三年夏	二〇七三年秋	二〇七三年冬	二〇七四年春	二〇七四年夏	二〇七四年秋	二〇七四年冬	二〇七五年春	二〇七五年夏	二〇七五年秋	二〇七五年冬	二〇七六年春	二〇七六年夏	二〇七六年秋	二〇七六年冬	二〇七七年春	二〇七七年夏	二〇七七年秋	二〇七七年冬	二〇七八年春	二〇七八年夏	二〇七八年秋	二〇七八年冬	二〇七九年春	二〇七九年夏	二〇七九年秋	二〇七九年冬	二〇八〇年春	二〇八〇年夏	二〇八〇年秋	二〇八〇年冬	二〇八一年春	二〇八一年夏	二〇八一年秋	二〇八一年冬	二〇八二年春	二〇八二年夏	二〇八二年秋	二〇八二年冬	二〇八三年春	二〇八三年夏	二〇八三年秋	二〇八三年冬	二〇八四年春	二〇八四年夏	二〇八四年秋	二〇八四年冬	二〇八五年春	二〇八五年夏	二〇八五年秋	二〇八五年冬	二〇八六年春	二〇八六年夏	二〇八六年秋	二〇八六年冬	二〇八七年春	二〇八七年夏	二〇八七年秋	二〇八七年冬	二〇八八年春	二〇八八年夏	二〇八八年秋	二〇八八年冬	二〇八九年春	二〇八九年夏	二〇八九年秋	二〇八九年冬	二〇九〇年春	二〇九〇年夏	二〇九〇年秋	二〇九〇年冬	二〇九一年春	二〇九一年夏	二〇九一年秋	二〇九一年冬	二〇九二年春	二〇九二年夏	二〇九二年秋	二〇九二年冬	二〇九三年春	二〇九三年夏	二〇九三年秋	二〇九三年冬	二〇九四年春	二〇九四年夏	二〇九四年秋	二〇九四年冬	二〇九五年春	二〇九五年夏	二〇九五年秋	二〇九五年冬	二〇九六年春	二〇九六年夏	二〇九六年秋	二〇九六年冬	二〇九七年春	二〇九七年夏	二〇九七年秋	二〇九七年冬	二〇九八年春	二〇九八年夏	二〇九八年秋	二〇九八年冬	二〇九九年春	二〇九九年夏	二〇九九年秋	二〇九九年冬	二一〇〇年春	二一〇〇年夏	二一〇〇年秋	二一〇〇年冬	二一〇一年春	二一〇一年夏	二一〇一年秋	二一〇一年冬	二一〇二年春	二一〇二年夏	二一〇二年秋	二一〇二年冬	二一〇三年春	二一〇三年夏	二一〇三年秋	二一〇三年冬	二一〇四年春	二一〇四年夏	二一〇四年秋	二一〇四年冬	二一〇五年春	二一〇五年夏	二一〇五年秋	二一〇五年冬	二一〇六年春	二一〇六年夏	二一〇六年秋	二一〇六年冬	二一〇七年春	二一〇七年夏	二一〇七年秋	二一〇七年冬	二一〇八年春	二一〇八年夏	二一〇八年秋	二一〇八年冬	二一〇九年春	二一〇九年夏	二一〇九年秋	二一〇九年冬	二一〇一〇年春	二一〇一〇年夏	二一〇一〇年秋	二一〇一〇年冬	二一〇一一年春	二一〇一一年夏	二一〇一一年秋	二一〇一一年冬	二一〇一二年春	二一〇一二年夏	二一〇一二年秋	二一〇一二年冬	二一〇一三年春	二一〇一三年夏	二一〇一三年秋	二一〇一三年冬	二一〇一四年春	二一〇一四年夏	二一〇一四年秋	二一〇一四年冬	二一〇一五年春	二一〇一五年夏	二一〇一五年秋	二一〇一五年冬	二一〇一六年春	二一〇一六年夏	二一〇一六年秋	二一〇一六年冬	二一〇一七年春	二一〇一七年夏	二一〇一七年秋	二一〇一七年冬	二一〇一八年春	二一〇一八年夏	二一〇一八年秋	二一〇一八年冬	二一〇一九年春	二一〇一九年夏	二一〇一九年秋	二一〇一九年冬	二一〇二〇年春	二一〇二〇年夏	二一〇二〇年秋	二一〇二〇年冬	二一〇二一年春	二一〇二一年夏	二一〇二一年秋	二一〇二一年冬	二一〇二二年春	二一〇二二年夏	二一〇二二年秋	二一〇二二年冬	二一〇二三年春	二一〇二三年夏	二一〇二三年秋	二一〇二三年冬	二一〇二四年春	二一〇二四年夏	二一〇二四年秋	二一〇二四年冬	二一〇二五年春	二一〇二五年夏	二一〇二五年秋	二一〇二五年冬	二一〇二六年春	二一〇二六年夏	二一〇二六年秋	二一〇二六年冬	二一〇二七年春	二一〇二七年夏	二一〇二七年秋	二一〇二七年冬	二一〇二八年春	二一〇二八年夏	二一〇二八年秋	二一〇二八年冬	二一〇二九年春	二一〇二九年夏	二一〇二九年秋	二一〇二九年冬	二一〇三〇年春	二一〇三〇年夏	二一〇三〇年秋	二一〇三〇年冬	二一〇三一年春	二一〇三一年夏	二一〇三一年秋	二一〇三一年冬	二一〇三二年春	二一〇三二年夏	二一〇三二年秋	二一〇三二年冬	二一〇三三年春	二一〇三三年夏	二一〇三三年秋	二一〇三三年冬	二一〇三四年春	二一〇三四年夏	二一〇三四年秋	二一〇三四年冬	二一〇三五年春	二一〇三五年夏	二一〇三五年秋	二一〇三五年冬	二一〇三六年春	二一〇三六年夏	二一〇三六年秋	二一〇三六年冬	二一〇三七年春	二一〇三七年夏	二一〇三七年秋	二一〇三七年冬	二一〇三八年春	二一〇三八年夏	二一〇三八年秋	二一〇三八年冬	二一〇三九年春	二一〇三九年夏	二一〇三九年秋	二一〇三九年冬	二一〇四〇年春	二一〇四〇年夏	二一〇四〇年秋	二一〇四〇年冬	二一〇四一年春	二一〇四一年夏	二一〇四一年秋	二一〇四一年冬	二一〇四二年春	二一〇四二年夏	二一〇四二年秋	二一〇四二年冬	二一〇四三年春	二一〇四三年夏	二一〇四三年秋	二一〇四三年冬	二一〇四四年春	二一〇四四年夏	二一〇四四年秋	二一〇四四年冬	二一〇四五年春	二一〇四五年夏	二一〇四五年秋	二一〇四五年冬	二一〇四六年春	二一〇四六年夏	二一〇四六年秋	二一〇四六年冬	二一〇四七年春	二一〇四七年夏	二一〇四七年秋	二一〇四七年冬	二一〇四八年春	二一〇四八年夏	二一〇四八年秋	二一〇四八年冬	二一〇四九年春	二一〇四九年夏	二一〇四九年秋	二一〇四九年冬	二一〇五〇年春	二一〇五〇年夏	二一〇五〇年秋	二一〇五〇年冬	二一〇五一年春	二一〇五一年夏	二一〇五一年秋	二一〇五一年冬	二一〇五二年春	二一〇五二年夏	二一〇五二年秋	二一〇五二年冬	二一〇五三年春	二一〇五三年夏	二一〇五三年秋	二一〇五三年冬	二一〇五四年春	二一〇五四年夏	二一〇五四年秋	二一〇五四年冬	二一〇五五年春	二一〇五五年夏	二一〇五五年秋	二一〇五五年冬	二一〇五六年春	二一〇五六年夏	二一〇五六年秋	二一〇五六年冬	二一〇五七年春	二一〇五七年夏	二一〇五七年秋	二一〇五七年冬	二一〇五八年春	二一〇五八年夏	二一〇五八年秋	二一〇五八年冬	二一〇五九年春	二一〇五九年夏	二一〇五九年秋	二一〇五九年冬	二一〇六〇年春	二一〇六〇年夏	二一〇六〇年秋	二一〇六〇年冬	二一〇六一年春	二一〇六一年夏	二一〇六一年秋	二一〇六一年冬	二一〇六二年春	二一〇六二年夏	二一〇六二年秋	二一〇六二年冬	二一〇六三年春	二一〇六三年夏	二一〇六三年秋	二一〇六三年冬	二一〇六四年春	二一〇六四年夏	二一〇六四年秋	二一〇六四年冬	二一〇六五年春	二一〇六五年夏	二一〇六五年秋	二一〇六五年冬	二一〇六六年春	二一〇六六年夏	二一〇六六年秋	二一〇六六年冬	二一〇六七年春	二一〇六七年夏	二一〇六七年秋	二一〇六七年冬	二一〇六八年春	二一〇六八年夏	二一〇六八年秋	二一〇六八年冬	二一〇六九年春	二一〇六九年夏	二一〇六九年秋	二一〇六九年冬	二一〇七〇年春	二一〇七〇年夏	二一〇七〇年秋	二一〇七〇年冬	二一〇七一年春	二一〇七一年夏	二一〇七一年秋	二一〇七一年冬	二一〇七二年春	二一〇七二年夏	二一〇七二年秋	二一〇七二年冬	二一〇七三年春	二一〇七三年夏	二一〇七三年秋	二一〇七三年冬	二一〇七四年春	二一〇七四年夏	二一〇七四年秋	二一〇七四年冬	二一〇七五年春	二一〇七五年夏	二一〇七五年秋	二一〇七五年冬	二一〇七六年春	二一〇七六年夏	二一〇七六年秋	二一〇七六年冬	二一〇七七年春	二一〇七七年夏	二一〇七七年秋	二一〇七七年冬	二一〇七八年春	二一〇七八年夏	二一〇七八年秋	二一〇七八年冬	二一〇七九年春	二一〇七九年夏	二一〇七九年秋	二一〇七九年冬	二一〇八〇年春	二一〇八〇年夏	二一〇八〇年秋	二一〇八〇年冬	二一〇八一年春	二一〇八一年夏	二一〇八一年秋	二一〇八一年冬	二一〇八二年春	二一〇八二年夏	二一〇八二年秋	二一〇八二年冬	二一〇八三年春	二一〇八三年夏	二一〇八三年秋	二一〇八三年冬	二一〇八四年春	二一〇八四年夏	二一〇八四年秋	二一〇八四年冬	二一〇八五年春	二一〇八五年夏	二一〇八五年秋	二一〇八五年冬	二一〇八六年春	二一〇八六年夏	二一〇八六年秋	二一〇八六年冬	二一〇八七年春	二一〇八七年夏	二一〇八七年秋	二一〇八七年冬	二一〇八八年春	二一〇八八年夏	二一〇八八年秋	二一〇八八年冬	二一〇八九年春	二一〇八九年夏	二一〇八九年秋	二一〇八九年冬	二一〇九〇年春	二一〇九〇年夏	二一〇九〇年秋	二一〇九〇年冬	二一〇九一年春	二一〇九一年夏	二一〇九一年秋	二一〇九一年冬	二一〇九二年春	二一〇九二年夏	二一〇九二年秋	二一〇九二年冬	二一〇九三年春	二一〇九三年夏	二一〇九三年秋	二一〇九三年冬	二一〇九四年春	二一〇九四年夏	二一〇九四年秋	二一〇九四年冬	二一〇九五年春	二一〇九五年夏	二一〇九五年秋	二一〇九五年冬	二一〇九六年春	二一〇九六年夏	二一〇九六年秋	二一〇九六年冬	二一〇九七年春	二一〇九七年夏	二一〇九七年秋	二一〇九七年冬	二一〇九八年春	二一〇九八年夏	二一〇九八年秋	二一〇九八年冬	二一〇九九年春	二一〇九九年夏	二一〇九九年秋	二一〇九九年冬	二一〇一〇年春	二一〇一〇年夏	二一〇一〇年秋	二一〇一〇年冬	二一〇一一年春	二一〇一一年夏	二一〇一一年秋	二一〇一一年冬	二一〇一二年春	二一〇一二年夏	二一〇一二年秋	二一〇一二年冬	二一〇一三年春	二一〇一三年夏	二一〇一三年秋	二一〇一三年冬	二一〇一四年春	二一〇一四年夏	二一〇一四年秋	二一〇一四年冬	二一〇一五年春	二一〇一五年夏	二一〇一五年秋	二一〇一五年冬	二一〇一六年春	二一〇一六年夏	二一〇一六年秋	二一〇一六年冬	二一〇一七年春	二一〇一七年夏	二一〇一七年秋	二一〇一七年冬	二一〇一八年春	二一〇一八年夏	二一〇一八年秋	二一〇一八年冬	二一〇一九年春	二一〇一九年夏	二一〇一九年秋	二一〇一九年冬	二一〇二〇年春	二一〇二〇年夏	二一〇二〇年秋	二一〇二〇年冬	二一〇二一年春	二一〇二一年夏	二一〇二一年秋	二一〇二一年冬	二一〇二二年春	二一〇二二年夏	二一〇二二年秋	二一〇二二年冬	二一〇二三年春	二一〇二三年夏	二一〇二三年秋	二一〇二三年冬	二一〇二四年春	二一〇二四年夏	二一〇二四年秋	二
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	------	------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---

ロックバンド（7,300m付近）の登攀
▼ Climbing of Rock Band at 7,300m



第1陣は47名のポーターと共に11月3日に出発。第2陣は約80名で4日に出発した。然し、例年この時期は気候的に最適のトレッキング・シーズンのため、外国人トレッカーが多く、ポーターをつかまえていく時期でもある。

先発の宮崎副隊長が一度ポカラへ飛び、手配をしておいたために、ここまで集まったのであるが、その後が思うように集まらず、わかれわかれの出発となった。

キャラバンは5日間の行程でマチャプチャレBCに致り、ここを第一の荷物集積地とする。

マチャプチャレBCから前回のBC（4,200m）までは、ポーターに1個で2個分のお金を払い、食事と靴を支給することにした。

そして、この間の輸送のめどがついた段階で、次はさらに奥に建設する新BC（4,300m）への輸送を開始した。この間のポーターにはさらにサングラスが必要となる。ともあれ、我々の高所順応訓練中の20日までに新BCへの荷上げはほぼ完了した。

高所順応トレーニングは11月13日から始まった。テント・ピーク（5,666m）へ登るためにキャンプを3つ出して順繰りに宿泊し、身体を高所に馴すように計画された。体力づくり、スピードづくりをも目的としたため、荷上げ、荷下げも隊員のみで行なう。この高所順応トレーニングで、延べ30

人がテント・ピークへ登頂を果たして、所期の目的は達成された。宮崎副隊長のしつこいほどに念を入れた高所順応計画は大成功であった。

22日のベースキャンプ・オープニングセレモニーの後、星野総隊長一行はBCを離れた。

24日からはフルーテッド・ピーク方面での高所順応トレーニングと本番ルートの偵察に出発する。

順応ツアーも2度目。自分達で全ての道具を持って出発する。テント・ピークより高い場所に泊まり、さらに高い所まで到達し、身体の高所への順応を図ろうと云うものである。

ルート偵察隊は宮崎副隊長、神戸、弥野が行く。氷河の状態は3年前よりは良さそうである。それでもクレバスや氷塔をぬってルートを探す。

3年前のC1に泊り、探す。初日は氷河の左寄りに入ってみるが、大きな段差やクレバスに阻まれて不可能。2日目、今度は反対側に回り込むと良いルートが見つかる。ズタズタに荒れているアイスフォール帯が終わった台地の上に出られた。

上部から氷の崩落の跡が見られるために、それを避けられる氷の小山の下の平らな部分をC1（5,300m）設営地と決定する。

順応トレーニング・チームも、約6,000m地点まで登り、下山した。

12月1日、いよいよ登山開始。ルートは先日確認してある。シェルパは13人が各20kg、隊員は3

7,700m付近を登るアタック・メンバー
▼ Ascending the Slopes at 7,700m

人はC1入りのため個人装備のみであるが、9人が各15kgずつで1日400kgを越す荷物が上がってしまう。3日も続けると大半の荷物が上がる計算である。

初日にしてC1が設営され、山田、斎藤、小林の3人が入り、午後にはC2へのルート作業を開始する。

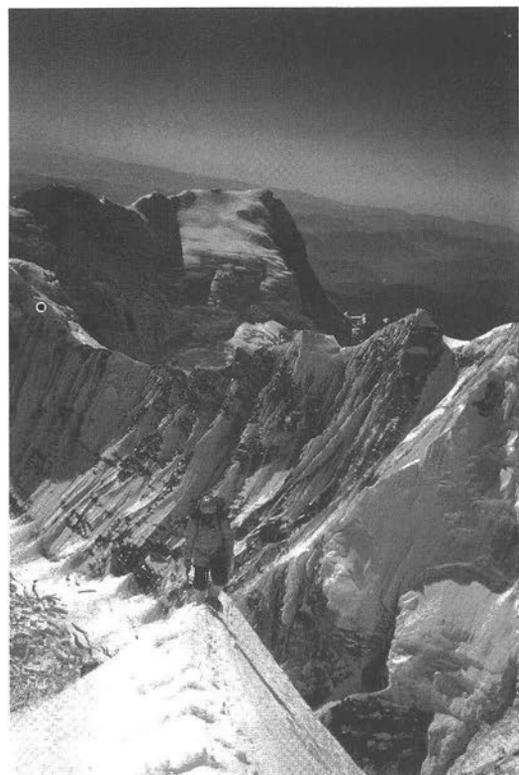
3日、山田パーティは先行してC2へのルートを作成させ、すぐ後からC2建設隊と移動隊が続く。12時の交信でルート作業隊はC2予定地直下に達している。後続も順調に登っている。これで同日建設が可能である。予定通りに進む。

ところが、好事魔多しとかで、13時45分、南壁にかかっていた氷崖がドーンと云う音響とともに崩れ落ちて来た。

雪崩は本流から外れていた。本当に幸運であった。本流はC1の左手約数10mの所を流れ、雪と氷が一本の尾根をつくり上げていた。

もし、本流に当たっていれば、そこにいた日本人4人、シェルパ6人はだれ1人として助からなかったはずである。

C1には、その日、張り足された2張りを入れ、



▲ 7,900m付近の雪稜 Ascending the snow ridge at 7,900m



6張りのテントとC1以上で必要な装備、食糧の90%以上が荷上げ済みであった。それらの大半が雪崩の爆風により飛ばされてしまっていた。テントに人が入っていれば大惨事であった。

すぐ下には大きなクレバス数本が口をあけていた。深淵にのみこまれてしまった物質のほとんどが回収不能と判断された。

とにかく、この夜C1付近に泊まる隊員9人とシェルパ9人の必要なものだけを回収し、一段下がった安全なところへ移動する。

夕方6時過ぎ、C2へのルート作業隊、建設隊がC2(6,100m)を建設して戻って来た。

C1は壊滅的打撃を受けた。登山の続行も危ぶまれる状況であった。

4日、C2に入った名塚、三枝、佐藤はC3へのルート作業をすることにし、他は全員で装備類の回収とキャンプの移動に当たることとする。午前、午後と回収作業をするも余り多くは望めなかった。

5日、C2への荷上げを再開する。登山の停滞は許されない。幸い天気も回復した。良い天候は我々の気持ちもやわらげ、上向かさせてくれる。C1での残品のチェックとBCの在庫品の数量をチェックし、何とか登山続行のめどをつける。

よくもあれだけの装備類を紛失しながらも短時日のうちに登山が続行できるまでこぎつけたものだ。自分たち自身で感心するほどである。

勿論、それにはショックを克服し、不便はガマ

頂上からダウラギリ山塊を眺める
▼ Panoramic Viewed of Daulagiri Himal from Summit.



ンをし、また互いに融通し合いながらの結果ではあるが。

災いを転じて福となさねばならない。諦めてしまっはおしまいである。

この日のルート工作も順調に行った。名塚ら3人が雪崩現場の惨状を見なかったことも幸いしていると思う。明日もう1日で、4～5本のロープを固定すればC3地点(前回のC4)に到達できそうである。

前回よりは10日間以上も早いスピードである。

6日、ルート工作隊の名塚ら3名は、C3地点(6,850m)に到達。然し、この日は佐藤がキャンプ設営中に左足に落石を受け負傷するアクシデントに見舞われた。幸いケガの方は打撲程度で済み、BCで5日間程休養するだけで復帰することができた。

翌7日、C3を50m程下部に移動し、隊員は滞在せずにC2へ下降した。

10日、C3(6,800m)を正式に建設する。

11日の午後から翌12日の昼頃まで南壁一帯は大量の降雪に見舞われ、C2で約1m、BCで40cmの積雪となった。

南壁の7,000m～7,400mにかけては、脆く、しかもほぼ垂直に立っている岩壁帯が立ちはだかり、くの字リッジ、三角雪田、フラットアイロンと云った難所が続くが、ここは名塚、三枝、小林

の若手隊員が力を発揮して頑張ってくれた。

17日、C4(7,400m)を建設。

続いて翌18日から19日にかけて、7,700mのミニ・ロックバンドの上部まで8ピッチ半のルート工作が完了し、翌日のアタックを決定する。

第一次アタックに山田、斎藤、三枝、小林の4名を選び19日、C4に入れる。

万全の高所順応をし、絶対の自信をもって登山を開始した訳だが、ここに至るまでにはヒマラヤ登山で考えられる雪崩、落石、降雪、クレバスへの転落等高所障害を除くあらゆる障害があった。それらを乗り越えてのアタック態勢の完了であった。

12月20日、いよいよ登頂の朝を迎えた。

アタックの朝のC4はマイナス40度、無風、快晴であった。

午前3時40分にC4を出発した山田、斎藤、三枝、小林の4隊員は快調に登攀を続け、14時40分、頂上稜線に飛び出し、15時17分、3名が登頂、斎藤隊員が少し遅れて登頂し、下山を開始した。急な雪壁を下り終えたところで魔の瞬間が訪れた。

エベレストに登頂出来なかった無念さを晴らした小林君の登頂を、次代う担う若者の誕生と喜び、「気をつけて下れ」と伝えた言葉の空しく、アンナプルナの大岩壁に彼は消えてしまった。

頂上から「ありがとうございました」と繰り返

し送って来た声は今も忘れられない。

小林君の転落を目撃していた山田、斎藤隊員は、現場やその下を捜索するが、切れ落ちた岩壁を見通すことが出来ず、再び下山を開始した。

C4へあと数10mのところまで固定ロープを伝って下っていた斎藤君は、迎えに出た三枝隊員と言葉を交わしていたが、小さな声とともに転落してしまう。

斎藤君ほどのヒマラヤ登山の経験と実績のある登山家の事故だけに信ずることが出来なかった。

彼等の死は厳然たる事実である。然し、ヒマラ

ヤの8,000m峰の3,500mもの大岩壁を、彼等を含む私共が登り切った事実は消えるものではない。

私共は決して彼等を忘れることはない。そして山を登り続けます。

群馬県冬期アンナプルナI峰登山隊

総隊長＝星野光 隊長＝八木原罔明 副隊長＝宮崎勉 登攀隊長＝山田昇 隊員＝斎藤安平、名塚秀二、木村文江、阿久沢芳雄、三枝照雄、佐藤光由、神戸誠、弥野光一、小林俊之 医師＝藤田俊樹

MOURNING

好漢・斎藤安平、そんなに急いでなぜに逝く。

渡 辺 斉

それにしても、昨日アンナプルナI南壁C₁を襲ったブロック崩壊雪崩は、すさまじいものだった。

ガラガラと音をたて、大きな氷塊の数々が、真上から落下しはじめた。それに気づいたシェルパ達が、顔色を変え、全力疾走で右下方セラックの陰へ逃げ出した。BCから荷上げでC₁へ到着したばかりの私達も無我無中で走って身を伏せた。たった2m程の高さしかない小さな白い屏の陰へ。静かな昼下りの空気を断ち割る爆風。異様な音。本気で息の根を止められてしまいそうな長い時を感じながら、ようやく吸える息。雪ダルマが、そっと立上って視界の効き始めたC₁を見る。無い、無いのだ。天幕も、積み上げてあったプラパール箱も。おびただしい山程のロープ類も。埋ったかなと、思いながらも、首を廻して後ろを見ると、50m程下の大きなクレバス帯に点々と。C₁の全てが飛び散ってしまったのだった。この無残な光景を見て、ようやく我に返った。

一夜明けて今日、再び、水野君（静大山岳部員）と二人で、BCからC₁へ緊急補給資材等の一部を荷上げする。八木原隊長は、C₁再建を期し、新設C₁の中央で仁王立ち。宮崎副隊長、安平ちゃん達は、昨日の現場でクレバスへもぐって、食糧、器材の回収中との事。やがて彼等が回収器材を背負



って戻って来た。

『なかなか、ようやくくれますわい』と安平ちゃん。『きつい冗談も、これが最初で、きっと最後ですよ』と私。『それにしても、ようきれいに飛ばしたもんだ』。『あまり順調にロープが伸びているんで、チョッピリからかかってみたかったんでしょう』。是非ガンバッテチョーよ、と言って手を交して別れた。

安平ちゃんの手は、スリムな風貌に似ず、意外にも大きく、厚く、ごつかった。

50m程下って振り返ると、こぼれるばかりの白い歯の安平ちゃんが、未だ見送ってくれていた。

冬の薄い陽差しは、南壁を下から上へと駆足で
移り過ぎていく。12月4日午後3時30分、これが
彼との最期の別れになろうとは……………。

私と安平ちゃんとの出会いは、7年前の昭和56
年の暮れ、黒部内蔵助平での末明の朝であった。
彼等、名古屋山岳会の2人パーティは、昭和57年
正月期を利用して、八ツ峰末端から主稜縦走へ。私
達武蔵之國山岳会の4人パーティは、前劔右尾根
を目指していた。彼等の天幕の横を通りしな、朝
の挨拶を交したのがそれだった。彼等は、ものす
ごい速さで劔を走り抜け、我々は、主稜線へ出て
から悪天につかまり、難渋して劔へ立った。

しかし、この時点では名古屋山岳会のパーティ
に斎藤安平ちゃんがいたとは、知るよしもなかつ
たのである。

昭和60年、ブータンのガンケルプンスムへの参
加を機に、私はH A Jへ入会した。しかし、残念
ながら未登を誇るこのブータンの最高峰は登るこ
とが出来ず、次の機会を待つことになった。

昭和62年、再びガンケルプンスムへ向けて、H
A Jが登山隊を組織した。安平ちゃんは登攀隊長
として参加し、タクテックスを担当し、尾形隊長
を補佐することになった。私も隊員として参加す
ることが決り、この頃からH A Jの事務所で、安

平ちゃんと言葉を交す機会が多くなった。

彼の第一印象は、“誠実さ”を先づ感じた。

世界の高峰の数々に足跡を重ねてきたにもかか
わらず、その謙虚さも私には非常に好感のもて
るものだった。それは現在の登攀者に失われがち
となってきた、登山に対してもっとも大切な、そ
して基本的な、“山に対しての潔癖感”を感じる
男でもあった。ガンケルプンスムは相手国の事情
で流れ、隊がそのままスライドして目指したりモ
峰も諸般の情勢で延期となり、安平ちゃんと一緒
する山行は遠のいてしまった。

去年秋、ネパールで安平ちゃんと幾度かおしゃ
べりする機会があった。大津氏宅で、エキスペ
スハウスで、イミグレーションで。そんな折、彼
が、『サイさん12月中旬にひと吹きくる風には気
をつけた方がいいですよ』と言った言葉が今でも心
に残っている。

あれ程慎重で思慮深かった彼、ファイナルキャ
ンプ手前で一体何があったのか？ 満足してしま
ったのか？ そうではないでしょう。円熟期にあ
る君には、まだまだやり応えのある舞台が広がっ
ていたに違いないのだから。

(わたなべひとし 武蔵之國山岳会々員)

〔斎藤安平略歴〕

1953年1月23日、岐阜県生まれ。

高校在学中に名古屋山岳会に入会し、本格的登
山活動を始める。海外登山経歴は以下の通り。

1975年～79年 ヨーロッパ・アルプス、モンブ
ラン・プトレイ山稜全山、ドリュ・アメリカン・
ダイレクトルート等、約40ルートの登攀。

1981年6月 アラスカ・マッキンリー(6,194
m)南壁カシン・リッジから登頂

1982年秋 ダウラギリI峰(8,167m)北壁ベ
アー・ルートから登頂(カモシカ同人隊)

1983年～84年冬 チョモランマ(8,848m)北
壁7,800mで断念(カモシカ同人隊)

1984年秋 ガウリサンカール(7,134m)南東
稜から南峰(7,010m)登頂(日本山岳会東海支
部隊)

1985年春 アラスカ・マッキンリー(6,194m)
登頂(植村直己物語撮影隊)

1985年秋 サガルマータ(8,848m)南東稜か
ら南峰直下で断念(植村直己物語撮影隊)

1985年冬 マナスル(8,163m)ノーマル・ル
ートから山田昇とのペアで冬期無酸素登頂(カ
モシカ同人隊)

1986年夏 トランゴ・タワー(6,251m)南東壁
5,800mで断念(日本ヒマラヤ協会・ポーランド
合同隊)

1986年秋 ラプチュ・カン(7,367m)チベッ
トの未踏峰の偵察(日本ヒマラヤ協会隊)

1986年冬 マカルー(8,463m)山田昇とのペ
アで南東稜に挑み7,500mで断念(カモシカ同人隊)

1987年12月20日、アンナプルナI峰(8,091m)
南壁イギリス・ルートから冬期無酸素登頂に成功
後、C4手前にて転落。享年34歳。

地域ニュース

＜ 中 国 ＞

チベットで再び騒乱

前号の「ヒマラヤ」で「チベット旅行再開へ」と云うニュースをお知らせしたが、3月5日にラサで再び「チベット独立」を要求する大規模な暴動が発生し、不穏な空気に包まれている。

中国チベット自治区ラサ発の中国新聞社電によると、度重なるチベット独立を求める暴動事件の頻発に対してチベット自治区のラサ市公安当局は、3月9日、反革命扇動罪で指導者の1人とみられるチベット仏教僧ら3名を逮捕したとの報道があり、今後、当局が独立の動きに対し、強い姿勢で臨むことを示したと受け止められている。

当局の強い姿勢を反映するように、10日の国営新華社電はチベット自治区のドジェ・ツェリン主席がさる5日行った独立派への警告演説を報じた。それによると、ドジェ主席は「少数の分裂主義は、人民政府の抑制した辛抱強い教育を軟弱で欺けるものとみなし、再びラサで騒乱事件を作り出し、チベットの歴史的前進を妨害しようとするところにいる。然し、絶対に放任しない」と語った。ドルジェ主席らは、去る1月、独立派のダライ・ラマと並ぶ仏教界の有力指導者で、中国当局支持のパンチェン・ラマ全国人民代表大会常務副委員長のチベット視察を受け入れ、その指示の下で、第一次暴動における逮捕者の大半を釈放し、さらに外国人観光客の許可を発表するなど寛大な処置で、事態を乗り切ろうとしていた。こうした中で、3月初旬、チベット仏教祈とう会を開催し、内外に情勢の安定ぶりを示そうとした訳だが、その最終日に暴動が再発、当局の目論みは消えてしまった。こうした「失敗」の教訓が、ドルジェ主席の発言につながったものと見られるが、その一方で、ドルジェ主席は騒乱の発生によっても「党のチベットに於ける現行の方針、政策に変更はあり得ない」と述べている。これは、開発が遅れているチベットに対して、従来通りの方針で改革を進め、チベ

ット人の不満を解消する一方で、独立を求めるグループに対して、強い姿勢で臨むことを明らかにしたものと云えよう。(3月12日 読売新聞他)

天山山脈で岩画多数発見

約3千年昔の「セックス」を主題とした大型岩石彫刻がこのほど中国奥地の天山山脈でみつかった。面積およそ120平方メートル。これだけ規模の大きな岩石彫刻が発見されたのは珍しい。

3月17日の光明日報によると、この岩石彫刻は、中国・新疆ウイグル自治区フートゥビー(呼図壁)県内で考古学者らによって発見された。県都フートゥビー西南約75kmの天山の奥まったところにある。岩面は平らで、大小さまざまのかなり規則的な踊りをしている数百人の人物が描かれている。男女の特徴ははっきりしており、大きいのは実物より大きく、小さいのは10cmほど。女性は殆ど裸体で、踊っているか、男の上に折り重なったようなもの、男あるいは猿面人身像と性交しているさまを示している。

ここ数年、新疆では考古学者達がアルタイ山、天山、崑崙山、パミールなどで野生のヒツジ、走るシカ、狩猟、舞踊、いくさ等の岩石彫刻を何千とみつけたが、今回の発見は、最も価値あるものだとしている。新疆考古研究所の王炳華研究室主任は、「生殖崇拜をテーマにした、これほど大規模な岩石彫の発見は、世界でも初めてではないか。原始社会史、原始人の物の考え方、巫術(ふじゅつ)と宗教、舞踊、彫刻、芸術や古代民族史の研究など広範な分野で大きな科学的価値をもつと思う」と話している。この岩石彫刻がつくられたのは、原始社会後期の父系氏族社会の段階、ほぼ3千年昔で、「作者」は恐らく当時、新疆北部にいた辺境民族であろう、と同研究所はみている。

チョモランマ冬期登頂断念

ウータンクラブ隊

チョモランマ(8,848m)冬期登頂を狙っていたウータンクラブ隊(長谷川恒男隊長ら4名)は、北東稜新ルートの7,650mで断念し、2月28日夜、ラサに帰着した。

同隊は、昨年11月24日にA・BC入りした後、東北東稜と北東稜のぶつかる8,390mに直上するクローワールにルートを変更して登山活動を展開していた。12月28日にC・4(7,400m)を設営し、30日には7,500mまでルートを延ばしていたが、其の後、冬の強風等に阻まれ思うようにルートは延びなかったようである。

＜パキスタン＞

冬期ブロード・ピーク登頂

K2(8,611m)の冬期初登頂を目指している国際隊(アンジェイ・ザヴァダ隊長ら30名)は、3月7日、マチュイ・ベルカ隊員(ポーランド)がブロード・ピーク(8,047m)の登頂に6日成功したことを明らかにした。

カラコルム山脈での冬期8,000m峰登頂は初めて。

尚、同隊のK2登山の方は、秒速40メートル近い強風と零下50度の厳寒に阻まれ、進展がなかったと伝えられている。

インフォメーション

『上昇するヒマラヤ』刊行

世界の屋根ヒマラヤはいつ、どのようにして高くなったのか。地球上で最大規模の起伏運動であるヒマラヤ山脈の隆起上昇の過程を8年間にわたって大がかりな調査・研究を続けてきた文部省海外学術調査「ネパールヒマラヤ地殻変動の研究」班(代表、木崎甲子郎・琉球大理学部教授)は「ヒマラヤは2千万年前に隆起を開始。初めは徐々にゆっくりだったが、70万年前から急上昇、現在も進行中」とのプロセスを解明。最近の上昇は年間10ミリにも達するデータも得たと云われる。これらを集大成した報告書が、『上昇するヒマラヤ』(築地書館)としてこのほど刊行された。

調査結果によると、まず、新生代第三紀初め(約4千5百万年前)にインド亜大陸とユーラシア大陸が衝突。中新世初め(約2千万年前)になって、インド亜大陸の北側の海岸線付近が隆起し始めた。徐々に、ゆっくりと上昇し、その隆起は次

第に南方にも波及していく。そして、第4紀中期(約70万年前)以後はシワリク山地などのヒマラヤ前線山地の隆起も伴って急激になったと云う。

また、上昇スピードは2百万年前一百万年前は年間3～4ミリ、その後、現在にかけて10ミリと云うデータも得た。これは中国国家地震局が過去30年間の全土精密水準測量の結果、ヒマラヤ山脈北側のチベット高原南端部は年平均10ミリの速さで隆起しているとの最新データとも一致。ヒマラヤは現在も上昇を続けていることを示していた。

ヒマラヤ山脈は、大陸が衝突して誕生したことは判っているが、どうしてこれほど高くなったのか、いつどのようなプロセスで上昇したのか、はっきりしておらず、その上、同山脈は長大で起伏の大きな地域であるためにこれまで山脈形成を探る総合的な科学調査がなかった。

同研究班は、「ヒマラヤの上昇」にテーマを絞り、同地域での地質研究に実績のある北海道や東京都立、京都、和歌山、島根、広島、琉球の七大学から地質学、地形学、測量学の専門家15人にネパール地質鉱山局のスタッフや大学院生が加わって編成。55年度から三期に分けて、ネパール中部、東部、西部の三地域でヒマラヤ山脈を南北に横断する河谷域を集中的に現地調査した。

ヒマラヤ山中での水準測量をはじめ、山が隆起する際に削られ、たい積した土砂の状況、古地磁気や活断層調査などにより、数千万年前から現在に至る多くの地殻変動のデータを入手。ヒマラヤ山脈基盤の地質構造は古い化石の多い北側のテチスたい積物帯から南へ3つの地質区分があり、南のシワリクたい積物帯は急上昇した際のものとなり、これらを総合し山脈形成の全体像が明らかになった。

A4変形判 240ページ 築地書館

定価12,500円(但し、'88年4月末までは特別定価9,700円)

東京集会のお知らせ

4月の東京集会は下記の通り開催致します。

日時 4月25日(月)午後7時～

場所 HAJルーム

1987年パキスタン登山隊

パキスタン観光省の発表によると、1987年にパキスタンを訪れた外国登山隊の概要は以下の通りである。

まず、外国隊への登山許可であるが、昨年は申請のあった60隊に許可を交付したが、その内11隊は登山隊側の事情により計画をキャンセルした。

15ヶ国から47隊の登山隊がパキスタンを訪れ、49のピークに挑んだが、登頂に成功したのはその内15隊だけであった。このところ毎年賑わいを見せていたK2は登頂者がゼロと云う結果に終わった。パキスタンを訪れた外国人登山者の総数は、317人で、前年比で約100名の減少となった。

一方、遭難事故の方はこれまでで最も少ない3件であった。然し、残念ながらこの内2件の事故はK2とキンヤン・キッシュの日本隊で起こったものである。

登山隊からのロイヤリティー収入の総額は、1,816,375ルピーで、前年比で約30万ルピーの減収となった。

国別の登山隊は、次の通りである。

国名	登山隊数	登山者数	ピーク数
1. 日本	8	49	7
2. フランス	7	45	7
3. スペイン	6	51	6
4. イギリス	5	30	6
5. 西ドイツ	4	21	4
6. イタリア	3	25	3
7. アメリカ	3	16	3
8. ユーゴスラビア	2	18	3
9. オーストリア	2	16	2
10. スイス	2	9	2
11. ニュージーランド	1	16	1
12. メキシコ	1	8	1
13. ノルウェー	1	6	1
14. ルクセンブルグ	1	5	1
15. 韓国	1	2	1
計	47隊	317人	49山

1987年パキスタン登山隊一覽

山名	高度	国(隊)名	隊長名	隊員数	期間	結果
1. K2 (南東稜)	8,611	高山研究所	遠藤晴行	9	4/20～120日	×
2. " (南壁)	"	スイス	Jean Troillet	4	5/15～120日	×
3. " (南東稜)	"	フランス	Rolland Martine	6	5/20～120日	×
4. " (南稜)	"	アメリカ	Doug Scott	7	6/15～120日	×
5. " (南東稜)	"	東洋大学合同隊	大滝憲司郎	16	6/20～120日	×
6. " (南壁)	"	スペイン	Alberto Posada Alonso	17	7/1～120日	×
7. ガッシャー・ブルムⅠ峰	8,068	メキシコ	Octavio Hector Cammcho	13	4/1～90日	中止
8. " (南壁)	"	カトマンズクラブ	常陸民生	2	4/25～90日	×
9. " (北稜)	"	ニュージーランド	Robert Edwin Hall	16	5/25～90日	×
10. "	"	スペイン	Juan Ignacio Lorente	6	6/15～90日	×
11. ガッシャー・ブルムⅡ峰	8,035	アメリカ	Malachi Miller	5	5/1～90日	○
12. "	"	イギリス	Roger Payne	9	G.Ⅳは×	○
13. "	"	西ドイツ	Seym Hans Henning	7	6/1～90日	○

山名	高度	国(隊)名	隊長名	隊員数	期間	結果
14. ガッシャー・ブルムII峰(東稜)	8,035	フランス	Claude Jager	13	7/1 ~ 90日	×
15. " (南西壁)	"	ルクセンブルグ	Berger Eugene	5	7/5 ~ 90日	○
16. " (南壁)	"	スペイン	Manuel Amat Castillo	5	8/1 ~ 90日	×
17. ブロード・ピーク	8,047	スイス	Brunno Honegger	5	5/1 ~ 90日	○
18. " (南西壁)	"	ユーゴスラビア	Slavko Cankar	5	5/10 ~ 90日	×
19. " (北稜)	"	イギリス	Mark Edward Hallam	4	6/1 ~ 90日	×
20. " (西壁)	"	フランス	Louis Brabet	7	6/1 ~ 90日	×
21. " (中央峰)	8,016	メキシコ	Antonio Ramon Cartes	8	6/3 ~ 90日	×
22. " (南西壁)	8,047	ノルウェー	Ragnhild Amunden	6	6/10 ~ 90日	×
23. " (西壁)	"	イタリア	Mario Carrara	10	7/1 ~ 90日	中止
24. " (南西稜)	"	フランス	Pierre Mazeaud	5	7/1 ~ 90日	×
25. " (中央峰)	8,016	スペイン	Josef Estruch	6	7/20 ~ 90日	○
26. バルトロ・カンリ	7,312	ニュージーランド	Robert Edwin Hall	20	G1と継続中止	.
27. チョゴリザ	7,665	フランス	J. E. Henault	6	7/11 ~ 90日	○
28. ラトックI峰	7,150	フランス	Terry Laurent	3	6/25 ~ 90日	×
29. ラトックII峰	7,145	イギリス	John Edward Howard	4	5/25 ~ 90日	×
30. ムスターグ・タワー	7,273	韓国	Myeong-Ju Lee	2	7/20 ~ 90日	×
31. "	"	アメリカ	Michael M. Covington	11	8/1 ~ 90日	中止
32. トランゴ・タワー	6,251	ユーゴスラビア	Slavko Cankar	5	(Broadと継続)	○
33. "	"	スイス・仏合同	Stephane Schaffter	5	5/15 ~ 90日	○
34. バインタ・ブラック	7,285	アメリカ	Eric Brnad	5	5/15 ~ 90日	中止
35. "	"	イギリス	Duncan P. Tunstall	4	7/1 ~ 90日	中止
36. ラカボシ	7,788	明治大学隊	山本宗彦	3	5/15 ~ 60日	×
37. "	"	西ドイツ	Hubert Blecher	5	6/1 ~ 60日	×
38. "	"	ユーゴスラビア	Radovic Igor	12	6/15 ~ 60日	×
39. "	"	スイス	Werner Fux	4	7/1 ~ 60日	中止
40. ソスブン・ブラック	6,415	アメリカ	Tomb Kimbrell	6	4/1 ~ 90日	中止
41. キンヤン・キッシュ	7,852	サンナビキ同人	岡本正人	6	5/1 ~ 90日	×
42. トリヴォール	7,728	アメリカ	Felix Knauth	4	6/6 ~ 90日	中止
43. ヒスパー・ムスターグ	7,342	西ドイツ	Gunter Schulz	4	6/14 ~ 90日	×
44. バツーラ	7,785	オーストリア	Kubick Theodor	7	6/15 ~ 90日	×
45. パスー	7,284	イタリア	Domenico Dal Molin	10	7/20 ~ 90日	×
46. スパンティック	7,027	イギリス	A. V. Sanders	6	8/1 ~ 90日	○
47. シャーハン・ドック	6,320	日本S・D隊	本多勝一	8	7/7 ~ 90日	×
48. ナンガバルバット(南面)	8,125	オーストラリア	James Van Gelder	9	4/1 ~ 60日	中止
49. "	"	イタリア	Agastino Da Polenza	10		○
50. " (西面)	"	スペイン	Javier Bermejo Garde	4	5/1 ~ 60日	×
51. " (南西稜)	"	アメリカ	Bernard Herse	4	7/15 ~ 60日	×
52. " (西面)	"	スピダーニエ同人	坂原忠清	7	7/20 ~ 60日	○
53. " (南面)	"	アウト・ドアー隊	玉田 仁	4	8/1 ~ 60日	×
54. " (西面)	"	スペイン	Santiago Arripes Perez	13	8/1 ~ 60日	○

山名	高度	国(隊)名	隊長名	隊員数	期間	結果
55. イストル・オ・ナール	7,403	イタリア	Livio Vishtini	7	7/20～90日	×
56. "	7,398	西ドイツ	Fendt Alfred	5	8/10～90日	○
57. ウドレン・ゾム	7,108	オーストリア	Marcus Schmuck	10	7/17～90日	中止
58. 無名峰	6,240	イギリス	Gary Murton	7	7/21～90日	×
59. トリボポアン	6,106	オーストリア	Harry Grun	9	6/1～90日	○

1988年パキスタン登山隊一覧

山名	高度	国(隊)名	隊長名	隊員数	期間
1. K2 (南 稜)	8,611	アメリカ	Stephen J. Boyer	4	5/10～120日
2. " (南西稜)	"	ユーゴスラビア	Tomaz Jamnik	15	5/30～120日
3. " (南東稜)	"	アメリカ	Roger Marshall	10	6/1～120日
4. " (")	"	スペイン	Jordi Magrina Guell	7	6/30～120日
5. ガッシャー・ブルムⅠ峰 (南東稜)	8,068	チェコスロバキア	Robart Galfy	25	4/30～90日
6. " (南西稜)	"	メキシコ	George Hermosillo	8	5/1～90日
7. " (北 壁)	"	アメリカ	Ethan Vanmatre	10	5/15～90日
8. " (南西稜)	"	アメリカ	Gary N. Speer	11	5/20～90日
9. " (北 壁)	"	フランス	Boyer Jean Pierre	20	7/1～90日
10. "	"	ベルギー	Vanhees Jan Puttekomheide	-	7/15～90日
11. ガッシャー・ブルムⅡ峰 (南 壁)	8,035	オーストリア	Marcus Schmuck	20	4/20～90日
12. " (南 壁)	"	フランス	Bernard Muller	20	5/9～90日
13. " (東 稜)	"	オランダ	Ronald Naar	8	5/15～90日
14. " (東 稜)	"	スイス	Max Eiselin	-	5/31～90日
15. " (南西稜)	"	女子登山クラブ	橋本しをり	9	6/15～90日
16. " (サウス・スパー)	"	フランス	Fedele Jean Pierre Les	8	6/26～90日
17. "	"	フランス	Herve Sachetat	7	7/10～90日
18. "	"	H A J	飛田和夫	8	9/16～90日
19. ブロード・ピーク (西 稜)	8,047	昭登山岳会	酒井国光	13	5/1～90日
20. "	"	フランス	Yves Astier	6	7/15～90日
21. " (西 稜)	"	ベルギー	Jacques Collaer	11	5/15～90日
22. " (西 稜)	"	韓 国	Sim Euy Sup	13	6/1～90日
23. " (南西壁)	"	富山県岳連	佐伯尚幸	16	6/15～90日
24. ガッシャー・ブルムⅢ峰	7,952	ベルギー	Vanhees Jan Puttekomheide	-	7/1～60日
25. ガッシャー・ブルムⅣ峰	7,925	イギリス	David Roy Lampard	4	5/1～90日
26. シア・カンリ	7,422	フランス	Boorgeon Christian	11	7/1～90日
27. チリン西峰	7,025	横濱山岳会	亀井 正	6	5/31～90日
28. マッシャーブルム隣接峰	7,200	イタリア	Zanotti Augusto	12	7/10～60日
29. パイユ	6,601	オーストリア	Robert Renzler	10	7/1～60日
30. トランゴ・タワー	6,257	ユーゴスラビア	Igor Jamnikar Koroska	12	5/1～60日

山名	高度	国(隊)名	隊長名	隊員数	期間
31. トランゴ・タワー	6,251	カナダ	Wood Worth	10	5/15～60日
32. " (南壁)	"	スイス・ポーランド	Ersard Loretan	4	6/1～60日
33. "	"	スイス	Sherrer Philippe	-	6/15～60日
34. "	"	登攀クラブ蒼水	丸藤正晴	7	7/2～60日
35. ネームレス・タワー	6,159	西ドイツ	Heran Hartmut	12	8/15～60日
36. ビアフォ・タワー	6,083	イタリア	Giordani Maurizio	8	5/4～60日
37. キンヤン・キッシュ	7,852	イギリス	Andrew Wing Field	5	6/1～60日
38. プマリ・チッシュ	7,350	フランス	Kelle Jaouques	-	7/8～60日
39. ユクシン・ガルダン・サール	7,530	パ・伊合同	Arturo Bergamaschi	15	6/25～60日
40. ルプガル・サール	7,200	秋田県岳連	丸山芳雄	7	6/25～60日
41. ディステギル・サール	7,885	東京都庁山岳部	後藤 純	5	5/20～60日
42. "	"	西ドイツ	Herbert Tschochner	8	7/1～60日
43. ビアーレ	6,730	イギリス	Mike Searle	9	6/15～60日
44. スパンティーク	7,027	西ドイツ	Herrn Herbert Streibel	20	6/19～60日
45. バインター・ブラック	7,287	西ドイツ	Dieter Elsner	5	7/1～60日
46. ラトックⅢ (南西壁)	6,860	イタリア	Marco Forcatura	4	5/15～60日
47. バツラ I	7,785	ポーランド	Piotr Motecki	12	5/23～60日
48. P. 6855 (バツラ)	6,885	大阪歯科大	河合峰雄	9	6/16～60日
49. ラカボン (西稜)	7,788	アメリカ	John Eb (Jeb) Schenck	7	5/24～60日
50. ハラモシュ	7,400	ポーランド	Janusz Baranek Gliwice	12	6/12～60日
51. シャハーン・ドック	6,320	日本S・D隊	本多勝一	6	7/15～60日
52. ラキオト・ピーク	7,070	韓国	Won Deshik	7	5/1～60日
53. チョンラ・ピーク	6,836	イギリス	Tom Middleton	5	9/3～60日
54. ナンガ・バルバット (西面)	8,125	西ドイツ	Heinrich Koch	6	5/1～60日
55. " (")	"	スイス	Dupre Christian	6	5/15～60日
56. " (北面)	"	イタリア	Alno Giambisi Strada	9	5/20～60日
57. " (南面)	"	カナダ	Barry Kenneth	5	6/1～60日
58. " (西面)	"	高山研究所	遠藤晴行	7	6/1～60日
59. " (南面)	"	登歩渓流会	粕川要治 (中止)	7	6/15～60日
60. " (西面)	"	西ドイツ	E. Gundelach	7	6/18～60日
61. " (西面)	"	韓国	Il Hwan	10	7/15～60日
62. " (南面)	"	アメリカ	Thomas S. Mereness	12	8/21～60日
63. " (南面)	"	ポーランド	Maciej Berbeka	22	11月～3月

ソ連山旅への誘い^{いざな}

パミール、カフカス、チムブラク、アルタイ 1988年国際登山キャンプ実施要項

ソ連スポーツ委員会

V/O "SOVINTERSPORT"

ソ連国際登山キャンプ(The USSR International Mountaineering Camps)は、色々な国の登山愛好家を対象として、ソビエト連邦国内の最も美しい地方への訪問と、パミール(Pamirs)やカフカス(Kavkaz)、アルタイ(Altai)などへの高峰登山の機会を提供いたします。

この国際キャンプに参加されますと、ソ連の最も美しい場所を訪れて山登りをし、またソビエトの異なった地方民族と出会い、その生活文化に触れることもできましょう。

"パミール" キャンプ

参加者はパミールへの行きと帰りに2~3日、モスクワに滞在していただきます。モスクワからは快適な飛行機でオーシ(Osh)へ飛び、そこからレーニン峰山麓にあるアチク・タシ(Achik-Tash)谷のBCまでバスで入ります。

このキャンプには次の3つのコースが設定されています。

<コース1>- "アチク・タシ" キャンプ

アチク・タシBC(3,700m)からレーニン峰(Lenin/7,143m)と、第19回C P S U大会記念峰など、ザアライ(Zaalai)山域の5,000~6,000m峰に登れます。

7月4日モスクワ集合~7月28日解散、または7月29日モスクワ集合~8月22日解散の各25日間。費用は890ルーブル。

<コース2>- "フォルタンベック(Fortambek)" キャンプ

フォルタンベックBC(4,000m)より、通常ルートからの Kommunizm 峰(Communism/7,495m)や、E. アバラーコフ峰(E. Abalakov)、スロエフ峰(Suloev)など、ピョートル(Peter)山脈の峰々に登れます。

7月10日モスクワ集合~8月8日解散、または7月12日モスクワ集合~8月10日解散の各30日間。

費用は1,125ルーブル。

<コース3>- "モスクビン(Moskvina)" キャンプ

モスクビンBC(4,200m)より、ヴァリエーション・ルートからの Kommunizm 峰、コルジェネフスカヤ峰(Korzhenevskaja/7,105m)登山ができます。

7月6日モスクワ集合~8月4日解散、または7月8日モスクワ集合~8月6日解散の各30日間。費用は1,250ルーブル。

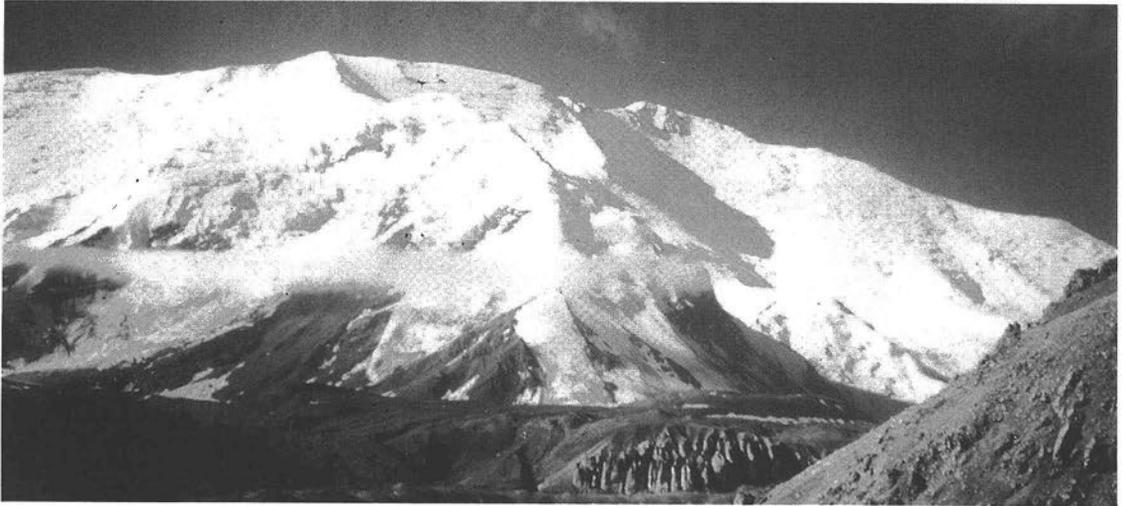
パミールで登山をおこなうには、特に上記のコース2および3を実施するには、卓越した体力と十分な登山経験が必要とされます。

"コーカサス-夏" キャンプ

プリュールブルース(Prielbrus)地方での全24日間の日程で、2つの期間が設定されています。クライマーは、ウシバ峰(Uzba)やシヘリダ峰(Shkhelda)、チャティン峰(Chatyn)、ウル・タウ・チャナ峰(Ullu-Tau-Chana)、ドンクス・オルン峰(Douguz-Orun)など名の知られた峰々への各ルートをはじめ、易しいものから難しいものまで、様々なルートを探ることができます。最も興味深いのはヨーロッパの最高峰エリブルース山(Mt. Elbrus/5,642m)登山でしょう。

ハイキングやバック・パッキングに來られる皆様には、大カフカス山脈のいくつもの峠を辿って、プリュールブルース地方の美しい自然はもちろん、

アチク・タシBCから見るレーニン峰 (PHOTO: S. HAYASHIJIRI)
▼Mt. Lenin (7,134m) viewed from basecamp "Achik-Tash"



スワネティ (Svanetia) 谷やアデュ・スウ (Adyr-Su) 谷、アディル・スウ (Adyl-Su) 谷など、魅惑的なグルジア (Gruziya/Georgia) 地方の山旅も楽しんでいただけます。

7月2日モスクワ集合～7月25日解散、または7月22日モスクワ集合～8月14日解散の各24日間。費用は1,108ルーブル。

“コーカサス-冬” キャンプ

技術的に易しいエリブルース山やグマチ峰 (Gumachi) への通常ルートの他、ナクラ・タウ峰 (Nakra-Tau) やドンクス・オルン峰、シヘリダ峰、シュロフスキー峰 (Shurovski) などへのいくつかのヴァリエーション・ルートも登れます。冬期登山のためにオープンされているのはバクサン (Baksan) 谷からのルートのみです。山岳スキーヤーはエリブルース山からのスキー滑降もできます。またチュジュ (Cheget) にはリフト設備があります。

2月16日モスクワ集合～3月3日解散、または3月3日モスクワ集合～3月19日解散の各17日間。費用は825ルーブル。

“コーカサス-春” キャンプ

春はエリブルース山からのスキー滑降には最も良い季節です。この時期にはプリュールブルース地方で山岳スキー・キャンプを設定することもできます。エリブルース山、グマチ峰、ナクラ・タウ峰、ドンクン・オルン峰、シヘリダ峰、シュロフスキー峰などへのスキー登山が可能です。

5月3日モスクワ集合～5月19日解散の17日間。費用は825ルーブル。

“コーカサス-秋” キャンプ

カフカスの秋は一般的に天候が安定しており、登山やトレッキングの範囲がひろがります。すべての峠は通行可能となりますし、山はどのルートからも登れるでしょう。

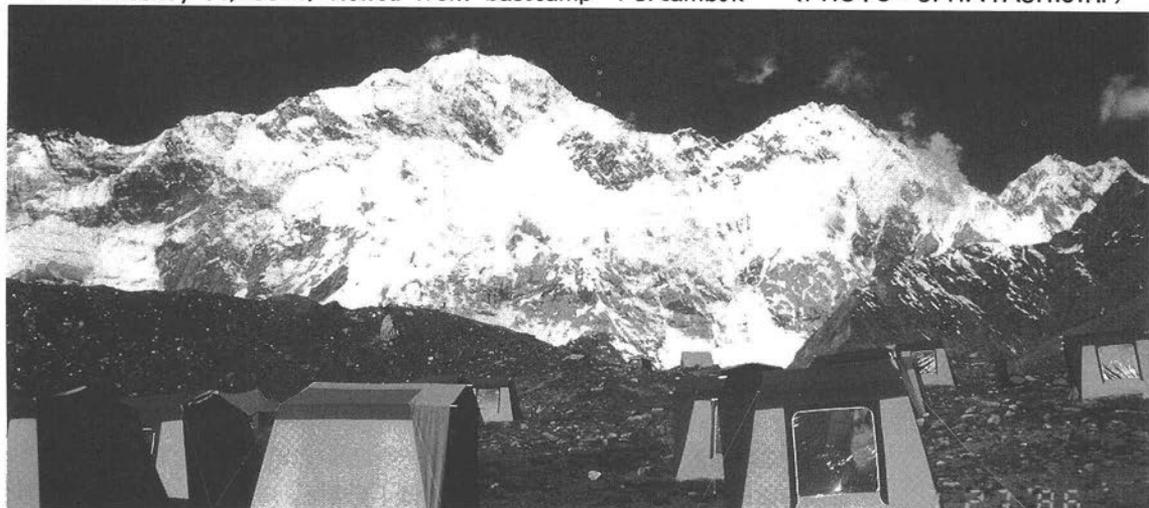
8月31日モスクワ集合～9月16日解散の17日間。費用は825ルーブル。

“アルタイ” キャンプ

アルタイ山脈の最高峰ベルーハ山 (Mt. Belukha / 4,506m) や周辺の山への登山、タイガの峠を越えて周辺の谷を巡るバック・パッキング旅行などができます。モスクワから飛行機でバルナウル (Barnaul) へ飛び、そこからローカル機でウス・コクサ (Ust-Koksa) へ、さらにヘリコプターでベルーハ山北面に源を発するアッケム (Akkem) 溪谷のBCに入ります。

7月25日モスクワ集合～8月17日解散の24日間。費用は920ルーブル。

この期間中にクライミングの対象としてアルタイ山中で最も面白いシャフラ (Shavla) 山域へ行くこともできます。シャフラ山域の代表的な峰としてはスカズカ (Skazka / 3,500m) とクラサフィサ (Krasavitsa / 3,700m) があり、ともに岩とミックスのすばらしいルートをもっています。移動はヘリコプターで行います。この場合の追加費用は



125 ルーブルです。

費用は 945 ルーブル。

“チムブラク-冬”キャンプ

この山域にはモロジョシナヤ峰(Molodjzhnaja)やポグレベツキー峰(Pogrebetsky)、イグレイ・チュク・スウ峰(Igly-Tyuk-su)、アバイ峰(Abaj)など、4,000~4,300mの比較的易しい山があり、ルートによってはスキー登山もできます。また、スキーを使って周辺の谷へのバック・パッキング旅行も可能です。

チムブラク渓谷はソビエト連邦カザフ共和国の首都アルマ・アタ(Alma-Ata)から25kmの距離に位置し、ザイリ・アラ・タウ(Zailij-Ala-Tau)山脈(=天山山脈)の支脈山中にあります。マラーヤ・アルマーティンカ(Malaja Almaatinka)川畔の標高2,200mにあるリフト発着所の建物がホテルになっています。このキャンプでは大いにスキーを楽しんでください。2人乗りのチェアー・リフトが利用できます。

3月18日モスクワ集合~4月4日解散の18日間。
費用は 945 ルーブル。

“チムブラク-夏”キャンプ

マロアルマーティンスコヘ(Maloalmaatinskoe)谷には素晴らしい山が沢山あります。存分に登山を楽しんでください。4,000~4,300mの頂へは、易しいものから難しいものまで、ミックスはもちろん岩のルートもあります。

8月29日モスクワ集合~9月14日解散の17日間。

申し込み要項

山からの下降にパラシュートやハンググライダーなどを使用することはお勧めできません。

参加者はソ連スポーツ委員会が発行する招待状に従ってソ連へのエントリー・ヴィザを取得しなければなりません。このエントリー・ヴィザにはソ連国内での移動ルートが表示されます。委員会の案内状に記された入国日、出国日は厳守してください。申請書は要項に従い以下の事項を明記して郵送してください。

- 1.母体となる山岳会名または使用する旅行代理店名、リーダーの氏名と住所
- 2.参加キャンプ名と番号、期間
- 3.目標の山とルート(予定として)
- 4.参加者の数
- 5.全参加者の氏名、性別、住所、生年月日、パスポート番号、国籍

申請先住所: USSR, 121069 Moscow,
Boljshoi Rzhovski pereulok, 5,
V/O "Sovintersport"

テレックス: 411578 PIK SU SOVINTERSPORT
SOVALPTOUR

電話 : 291 69 26

テレファックス: 290 64 97

(訳: 吉田憲司)

一枚の地図

山森 欣一

最近イギリスの地学協会とエベレスト財団が作成した「THE MOUNTAINS OF CENTRAL ASIA」という1:3,000,000の地図が届いた。この地図は、東は中国四川省の雪宝頂から西はヒンズー・クシュのティリッチ・ミールやバミールのコミュニティズムまで、南はヒマラヤ山脈、北は天山山脈までを含めた118cm×82.5cmの大きさで、標高を6色を使って表現し、湖は水色で表わされており、標高はメートル表示でとても見やすく、ヒマラヤを目指す岳人にとっては、貴重な資料となるだろう。

採用されている標高については、8,000m峰などについては最近の数値であるが、中国々内の山々の標高については疑問も多い。

例えば最近の中国側の発表では、ナムチャバルワについては7,782mとなっているが、この地図は7,651mを採用しており231mも低くなっているし、1985年に既に登頂されたナムナニは7,694mと発表されているのに7,739mを採用している。又、チベットのチャンタン高原の山々には、別表のように数多くの6,900m近い高峰が出現し、チベットに7,000m峰が2座出現した。

標高については、実際に登山対象として考える場合は重要な問題だ。特に7,000m台の未踏峰が少なくなった今日、当然6,000m台が目立ってくる。ところが、チャンタン高原のように高原自体の標高が4,500m～5,000m台もある場所では、6,300mの山と6,900mの山では、登山対象としての興味は相当に変わってくる。

一例を上げるとこの地図が6,815mの標高を与えているチャンタン高原の山がある。私はこの山を1984年夏にナムナニ、カン・リンポチュエ偵察の折に見ることが出来た。チャンタン高原南部の措勤

から改則に向かう途中にあり、連絡官が持参した100百分の一の地図（1977年の資料が基本になっている）には「夏康堅」の名前が付けられており、数座の5,000m～6,000m峰があるのだが、その最高峰には、6,822mの数値があった。たまたまこの山を真近くに望む場所で、故障したトラックが道を防いでいたため1時間程時間待ちする破目になり、この山を十分に観察した。標高はとても6,800mはなく、精々6,300m台であろうとみた。（ヒマラヤ156号参照）

この地図のチャンタン高原における6,900m級の山々や7,011m峰については、標高を充分検討する必要があるようだ。

ナムチャバルワの北に連なるニエンチェンタングラ山脈に7,353mの標高を与えられた山がある。この山はサルウィン河の源流近く其曲の源頭にあるが、この付近一帯は、ラサへの飛行路線上にあり度々眼下に高峰群を見る機会があったが、7,353mは高か過ぎるが、7,000m近い高度はありそうである。

この地図の山名についても多少問題がある。例えばエベレストは、既に中国がチョモランマ、ネパールがサガルマータと発表しているのだから、（）書位いはすべきだし、ナムナニをグルラマンダータとし、カン・リンポチュエをカイラスとしないなどの不統一も見られる。

地図を見てヒマラヤのことをあれこれ考える時間は楽しいものである。それがカラー刷りであればいやが上にも気分は昂揚する。この地図をもとに多くの岳人が中央アジアの山や高原を訪れることを期待したい。

M C A とその他地図との対比表

地図名 項目 地域	M C A		青 蔵 高 原		地 理 集		J N C 37		備 考
	山 名	標高	山 名	標高	山 名	標高	Feet	m	
チ ベ ツ ト 自 治 区	NAMJAGBARWA	7,651 ^m	南迦巴瓦峰	7,756 ^m	南迦巴瓦峰	7,756 ^m	24,440	7,449.3	最近の中国発表 7,782m
	JIALABAILI FENG	7,151	—	—	—	—	—	—	1986年HAJ初登頂
	—	6,840	—	—	—	—	—	—	阿扎水河 6,610m 若尼峰
	—	7,353	—	6,956	—	—	24,120	7,351.7	其曲源頭
	KANGTO	7,090	康格多山峰	7,060	康格多山	7,060	23,260	7,089.6	1988年同志社大 初登頂
	KULA KANGRI	7,554	庫拉崗日	7,538	庫拉崗日峰	7,538	—	—	1986年神戸大 初登頂
	—	7,223	宁金抗沙峰	7,191	—	—	22,300	6,797.0	西藏 7,206m 1986年初登頂
	QUNGMOGANGZE	—	穷母崗峰	7,048	—	—	20,140	6,138.6	
	NYAINQENTANGLHA	7,162	念青唐古拉峰	7,162	念青唐古拉峰	7,111	22,920	6,986.0	1986年東北大 初登頂
	CHOMOL HARI	7,314	—	—	—	—	23,997	7,314.2	
	LOINBO KANGRI	7,093	—	7,095	冷布崗日	7,095	21,250	6,477.0	
	—	7,120	—	6,903	—	—	22,780	6,943.3	1986年初登頂
	MAYER KANGRI	7,011	瑪依崗日	6,266	瑪依崗日	6,266	23,000	7,010.4	
	QONG MUZTAG	6,978	琼木孜塔格	6,962	琼木孜塔格	6,962	23,160	7,059.1	
	MUZTAG FENG	6,973	木孜塔格	6,973	木孜塔格峰	6,973	23,370	7,123.1	
ZANGSER KANGRI	6,950	藏色崗日	6,460	藏色崗日	6,460	22,800	6,949.4		
—	6,943	—	6,670	—	—	22,780	6,943.3	展金水河源頭 5,506m	
—	6,932	—	—	达日尤	6,282	20,800	6,399.8	GOMORI (戈木日)の南東	
PUROG KANGRI	6,929	普若崗日	6,482	普若崗日	6,278	22,730	6,928.1		
—	6,725	—	—	—	—	20,870	6,361.7	SERU KANGRI (色烏崗日)北	
—	6,815	—	—	—	—	20,800	6,339.8	夏康堅山	
四 川 省	XUEBAO DING	5,614	—	—	雪宝頂	5,588	19,750	6,019.8	1986年HAJ初登頂
	—	6,599	—	—	四姑娘山	6,250	21,650	6,598.9	1981年同志社大 初登頂
	GONGGA SHAN	7,556	貢嘎山	7,556	貢嘎山	7,556	24,535	7,478.2	
	CHOLA SHAN	6,141	雀儿山	6,168	雀儿山	6,168	20,149	6,141.4	
	—	6,010	—	—	—	—	19,720	6,010.6	格聂 6,204m
—	6,063	—	—	薩内日	6,032	19,890	6,062.4		
雲 南	MOIRIGKAWAGARBO	6,809	梅里雪山	6,740	梅里雪山	6,740	20,590	6,275.8	
	YULONG XUESHAN	5,730	—	5,596	玉龙雪山	5,596	18,880	5,754.6	
甘 肅	QILIAN SHAN	5,650	祁連山	5,541	祁連山	5,547	18,180	5,541.2	1985年初登頂
	DAXUE SHAN	6,150	—	—	大雪山	5,483	18,150	5,532.1	
青 海 省	MAQEN GANGRI	6,282	瑪卿崗日	6,282	瑪卿崗日	6,282	20,030	6,105.1	アムネマチン
	ALTUN SHAN	6,025	—	—	阿尔金山	5,798	19,770	6,025.8	
	BUKA DABAN FENG	6,860	—	6,860	布喀达坂峰	6,860	—	—	新青峰 6,860m
	GELADAINDOONG	6,525	—	6,621	各拉丹冬	6,621	21,410	6,525.7	1985年初登頂

(注) MCA=THE MOUNTAINS OF CENTRAL ASIA 青蔵高原=青蔵高原地図、中国科学院地理研究所編
 制 300 万分の 1 1979年12月第一版 地理集=中国自然地理図集、中国地図出版社編、1984年 6 月第一版
 JNCL37=JET NAVIGATION CHART 200 万分の 1

■ 寸 感 ■

先日、「黒部雪山」と云う本の出版記念会が催された。酒井国光さんの私家版本である。

15年もの星霜を重さねて雪の黒部を越えて跋涉した記録の数々は、重厚な内容でズシリとくる。

ひたすら登り続け、そして書き記し、それを活字とする。将に文武両道の岳人とは氏のような方を差すのであろう。

アラスカ、中国、カラコルムと海外の高峰登山を実践しながらも、常に日本の山を忘れずに登り続けられる氏の登山姿勢には誠に敬服させられる。

高度経済成長、円高と云った経済環境の中で、ヒマラヤは一層身近なものになり、誰もが出かけられる良き時代となった。そんな時代にヒマラヤへ出かけて帰ってくると日本の山から足が遠退いてしまう輩が安外多い。

日本の山にアルプスやヒマラヤを求めるのではなく、日本の山には日本の山の良さを見い出して、ヒマラヤの彼方にある己れの日本の山を求めて登り続けていきたいものである。

氏にして、「30年位登り続けて漸く登山者と云われるような人になりたいものである」と語る。肝に銘じたいものである。

事 務 局 日 誌 (3月)

6日(日) 都岳連・高所順応研究会出席(山森)

事務局から

昭和63年度分会費納入のお願い

本会の年会費(6,000円)は、前納制となっております。昭和63年度分(昭和63年4月1日～昭和64年3月31日)の年会費がまだの方は、速かにご納入下さいますようお願いいたします。

6月30日まで納入なき場合は、「ヒマラヤ」に「前金切れ」の表示をして督促しますが、それでも納入されない場合は、会費が納入されるまで「ヒマラヤ」の発送を停止させていただきます。

尚、終身会員制度もありますので、詳しくは事務局迄お問い合わせ下さい。

郵便振替 東京0-48954 日本ヒマラヤ協会

文部省登山研修所講演(尾形)

7日(月) 新青峰、リモ峰打ち合わせ

9日(水) 事務局打ち合わせ(稲田、山森)

10日(木) リモ峰打ち合わせ

12日(土) IMF副総裁M. S. コーリー氏とリモ隊について協議(ホテル・ニューオータニ、尾形)

ゲニ峰打ち合わせ

12日(土)～13日(日) 新青峰梱包

14日(月) ヒマラヤNo.197発送

15日(火) リモ峰打ち合わせ

16日(水) 新青峰隊荷三井倉庫渡し
新青峰、リモ峰打ち合わせ

27日(日) HAJ盛岡集会(山森)

28日(月) 東京集会(15名)

ヒマラヤNo.198(5月号)

昭和63年4月10日印刷 63年5月1日発行

発行人 遠藤 登

編集人 尾形 好雄

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

インドヒマラヤの手引

改訂版刊行!!

H AJの「インドヒマラヤの手引」は、インドヒマラヤのトラの巻として好評を得ておりますが、此の程、これ迄(第三版)の内容を大幅に変えて、改訂版として刊行致しました。

登山許可申請から遭難事故対策までインドヒマラヤのすべてが豊富な実例と共に盛り込まれております。また、付録にはインドヒマラヤの解禁峰一覧、地図、文献索引、登山規則等があります。

B5版 126ページ

(頒 価) 2,500円(送料250円)

(申込み先) 日本ヒマラヤ協会事務局まで

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-574-8880

三井航空サービス代理店2452号



カラコルムの秀峰 ウルタル山

遙かなる高み

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

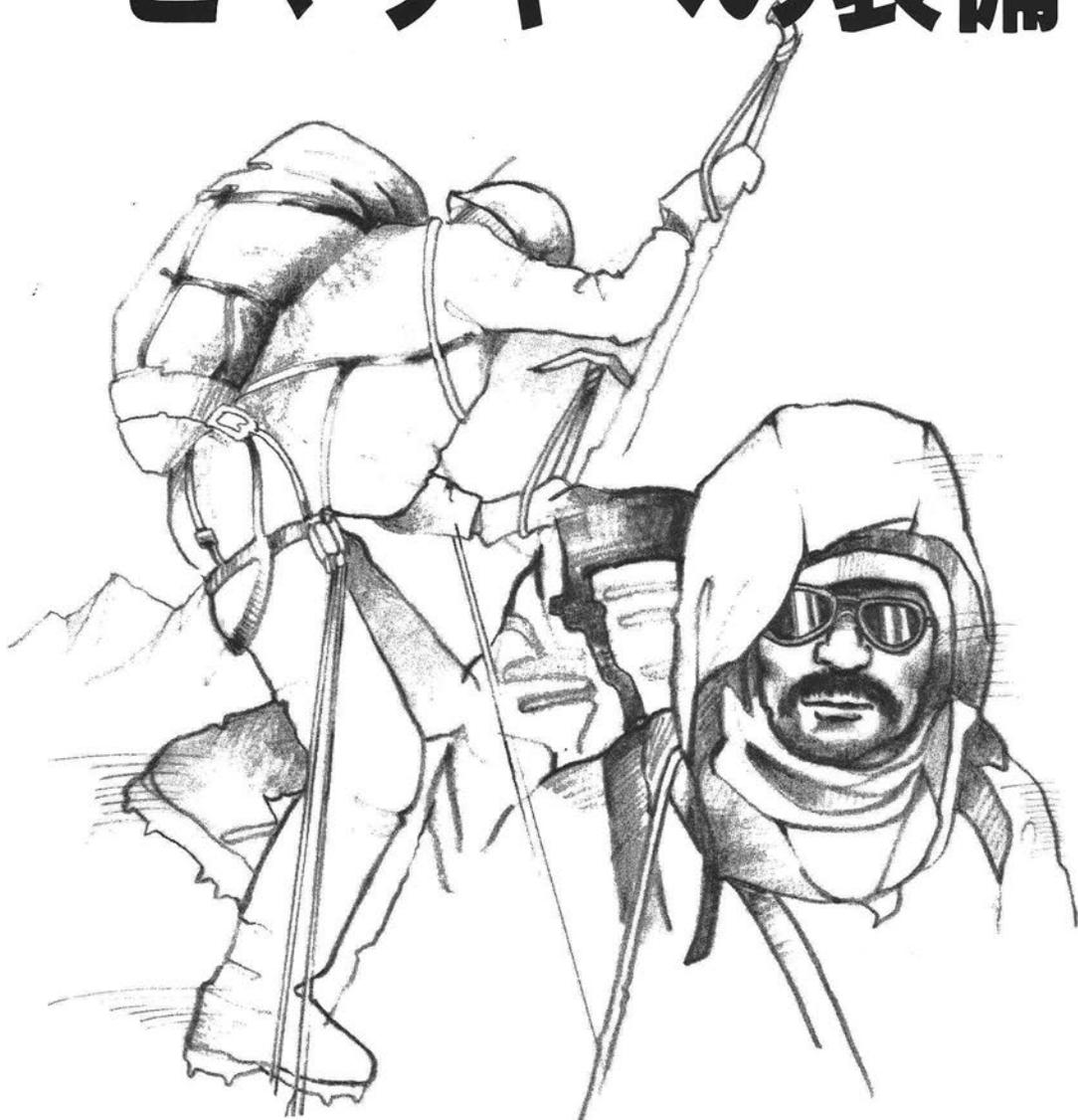
トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(237)1391(代表)
大阪営業所 〒541 大阪市東区平野町4-53-3 ニューライフ平野町202号室 ☎06(202)1391(代表)
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING (P) Ltd. P. O. BOX 3017
KATHMANDU, NEPAL ☎221707
運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ

- 登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番3号 ☎03(208)6601~3
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2丁目123番地 ☎0486(41)5707
- 水道橋登山店 / 〒101東京都千代田区三崎町2丁目8番14号 ☎03(264)5575~6
- 神田登山店 / 〒101東京都千代田区神田神保町1丁目8番地 ☎03(295)0622
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区新宿1丁目16番7号 ☎03(346)0301(代)
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町6番地 ☎0273(27)2397(代)
- 札幌登山店 / 〒060北海道札幌市中央区南二条西4丁目4番 ☎011(222)5305

- 新潟店 / 〒950新潟県新潟市東大通2丁目5番1号 ☎0252(43)6330
- 仙台店 / 〒980宮城県仙台市東八番丁107番地の36号 ☎0222(97)2442
- 町田ジョルナ店 / 〒194東京都町田市原町田6丁目6番地14号 ☎0427(26)6248(代)
- フーズショップ / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番43号 ☎03(232)1286
- 外商部 / 〒160東京都新宿区大久保2丁目19番10号 ☎03(200)7219
- 事務所 / 〒160東京都新宿区百人町1丁目4番15号 ☎03(200)1004